

あ い さ つ

年度末をひかえ、会員の先生方にはご多忙の日々をお過ごしのことと思います。また、日頃から本教育会振興のために、温かいご理解とご支援をいただいておりますこと、心からお礼申しあげます。

今、学校現場では、小学校では昨年度から、中学校では本年度から全面実施となりました新学習指導要領の主旨を踏まえた教育課程が実施されています。本教育会も、三好教育研究所と連携を図りながら、本年度より研究主題を『未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成』と改訂し、その実現をめざし取り組んできました。この研究主題は、「三好の子どもたちが、ふるさとの自然や人の温かさを大切にしながら、自分たちの未来を切り拓き、たくましく歩んでいく力を育成すること」を目標としています。

本年度は東祖谷小学校、池田中学校、三好教育研究所にて研究を深めていただきました。その成果を平成24年8月23日の「三好教育研究発表会」でご発表いただきました。

① 家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり

～小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び～

東祖谷小学校 教諭 森永 直美

② 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動

～E S D（持続発展教育）の視点を取り入れて～

池田中学校 教諭 丸岡 美枝

③ 三好郡・市小中学校における情報モラル教育

～学級担任アンケート調査と研究授業より～

三好教育研究所 研究員 山口 恭史

（現 昼間小学校 教諭）

少子化が進み、5つの小学校が統合された東祖谷小学校、並びに統合4年目を迎える池田中学校、どちらも様々な課題を抱えながらも、統合による変化を肯定的にとらえ、新しい校舎で生き生きと輝いている小学生や中学生の姿に逞しさを感じました。また、情報化社会の中、今後ますます必要不可欠となる情報モラル教育についての報告もありました。各教育現場での日々の取り組みの実践報告は、自校に対する熱い思いが伝わってくる素晴らしい発表でした。発表校のご労苦に対しまして心から敬意と感謝を申しあげます。また、講演会では元プロボクサー SRS ボクシングジム会長の坂本博之氏の「僕は運命を信じない」と題した講演も好評をいただきました。この研究紀要は各学校1部ずつCD化して配布させていただきます。園児・児童・生徒の学びの向上にご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、本研究紀要発行にあたりご指導・ご助言いただきました先生方、研究協力校（園）および関係各位に心よりお礼申し上げますとともに、会員の先生方のますますのご活躍をお祈りいたします。

平成25年3月

三好教育会 会長 新久保 由美子

《目次》

あいさつ

三好教育会 会長 新久保 由美子

-----研究指定校研究-----

P1～11

- 家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり
～小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び～

東祖谷小学校 教諭 森永 直美

P12～22

- 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動
～ESD(持続発展教育)の視点を取り入れて～

池田中学校 教諭 丸岡 美枝

P23～33

- 三好郡・市小中学校における情報モラル教育
～学級担任アンケート調査と研究授業より～

三好教育研究所 研究員(現 昼間小学校 教諭)
山口 恭史

-----教育研究所研究員研究-----

P34～50

- 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること

三好教育研究所 研究員 山下 達也

P51～62

- 三好市・三好郡の小・中学校におけるICT活用状況について

三好教育研究所 研究員 岡本 博一

P63～68

- 既刊「研究紀要」の内容一覧(平成元年以降)

家庭や地域，中学校との連携を密にした特色ある学校づくり ～小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び～

東祖谷小学校 教諭 森永 直美

1 はじめに

本校のある三好市東祖谷は，豊かな自然環境に恵まれ，四季折々の変化が美しい地域である。自然と共に生きる地域住民は，優しさと温かさに溢れており，学校教育に対してとても協力的である。しかし，一方では，交通条件及び地形的・文化的諸条件の厳しい山間地であり，過疎化・高齢化・少子化など大きな課題を抱えている。少子化による児童数の減少などに伴い，東祖谷にある名頃，菅生，落合，栃之瀬，和田（平成20年度休校）の5つの小学校が統合し，本年度「東祖谷小学校」として新しく開校した。

本校は，全校児童数45名のへき地3級指定校である。小中一体型の新しい校舎では，小中学生が共に明るくのびのびと学校生活を送っている。統合に向けては，新しい環境の中で子どもたちがよりよく学ぶことができるように，各校と中学校が連携しながら開校準備を進めてきた。子どもや保護者，教職員も期待と不安を抱えながら新しい学校での生活をスタートさせた。毎朝，中学生やたくさんの仲間と共にスクールバスに乗り，元気に登校してくる子どもたちの顔は，生き生きと輝いている。しかし，日々の教育活動を実践する中で，学校生活において改善すべき点や小中学校の連携のあり方など，たくさんの課題が生じてきた。そこで，その一つひとつの課題に対して，全教職員が一丸となって，家庭や地域，中学校との連携を密にした教育活動の実践に取り組んできた。

2 小学校の統合・開校に向けての取組

児童や保護者，教職員ができるだけ不安なく学校生活をスタートできるように，各校と中学校が連携し，計画的に開校準備を進めた。

(1) 交流活動

各校の児童が，お互いの顔や名前を知り，新しい友達とも仲良くできるように，みんなで一緒に学習し交流を図る機会を多く設けた。

「集合学習」では，学年ごとにいろいろな教科学習を行った。友だちが増えることにより，学習が活性化し，児童のいきいきとした表情を見ることができた。また，みんなで給食を食べたり，歌やゲームを楽しんだりした。3学期になって東祖谷小学校の校歌が完成し，歌唱練習にも取り組んだ。



他にも、地域の方にご指導いただき、祖谷衆太鼓の練習に取り組んだ。閉校式では、練習の成果を披露し、歴史ある学校の最後に花をそえた。現在は、地域の方に作曲していただいた「ふるさと学びや太鼓」を練習し、落成式や学習発表会で披露するなど、伝統を受け継いでいる。

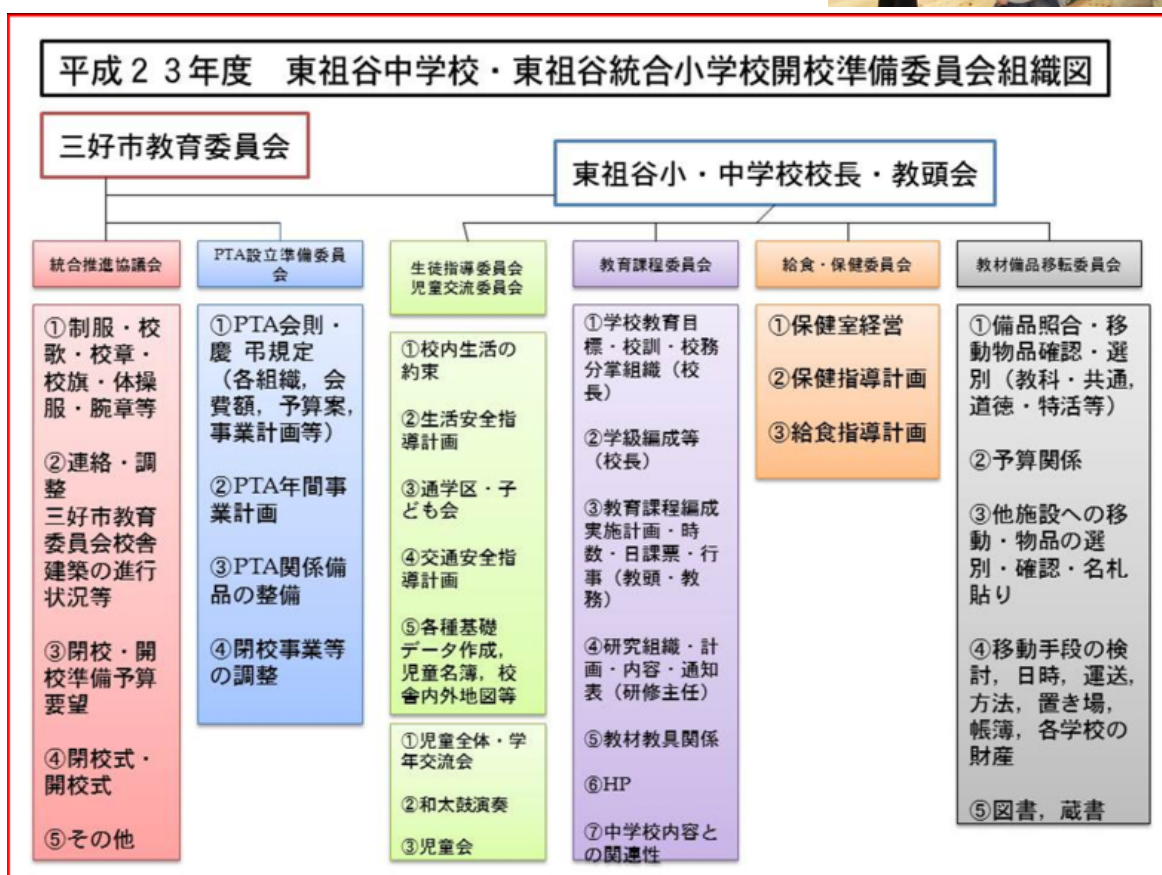
このような交流活動を通して、友だちとのかかわりを深めただけではなく、自分の思いや考えを伝え合うことができるようになってきた。また、子どもたちの新しい学校への期待も高まっていた。



(2) 東祖谷小・中学校開校準備委員会

統合・開校に向けては、東祖谷小・中学校開校準備委員会を開催し、組織づくりにも取り組んだ。開校準備委員会は、6つの委員会に分かれて、子どもたちにとって一番よい教育環境を考え、開校に向けての具体的な取り組みについて話し合った。制服や校歌の選定、日課表や行事、教育課程編成、備品の選別などについて、何回も協議を重ねた。

各委員会で決定した事項は「東祖谷小学校ガイドブック」にまとめられ、保護者に配布し各学校で入学説明会を行った。



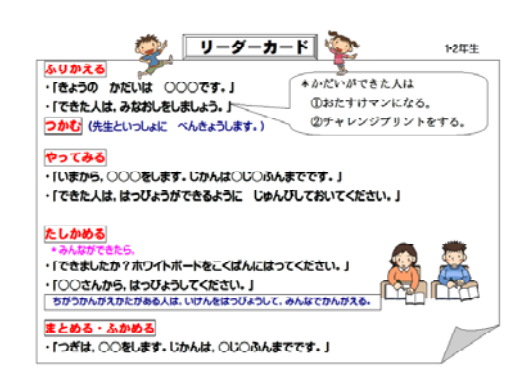
3 実践の紹介

ここからは、東祖谷小学校が開校し、日々取り組んでいる教育活動の実践について、3つのプロジェクトを紹介する。

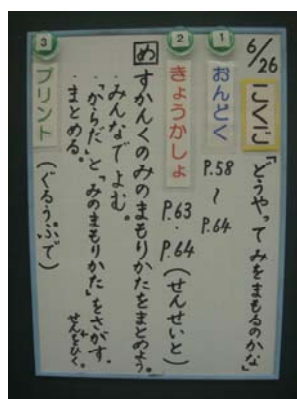
(1) 学力向上プロジェクト

① 学習リーダーの育成

これまで、各校の複式授業においては、「学習リーダー」を中心とした学び合いの授業を展開してきた。「学習リーダー」は、学習の流れを示すボードをもとにして、学習内容を伝えたり、意見をまとめたりして学習を進めていく。現在は、全学年単式学級ではあるが、全学級でこの方法を取り入れた授業を進めている。



(リーダーの進め方)



(授業の流れを書いたホワイトボード)



(間接指導の様子)

② 言語活動の充実

「話すこと・聞くこと・読むこと」の基礎・基本を定着させ、豊かな表現力の育成をめざして、朝の活動においても言語活動の充実を図っている。

「暗唱発表」では、国語の物語文や詩、名文などを覚え、全校児童の前で一人ずつ発表している。また、「祖谷っこ議会」では、児童会が中心となり司会、記録を担当し、全児童で学校生活目標を決めている。学校生活の課題や問題点についても、みんなで話し合い解決している。



【暗唱発表会】



【祖谷っこ議会】

③ 家庭学習習慣の定着

家庭での学習習慣を定着させるために、家庭と連携を図りながら、子どもたちに自主的な学習習慣が身につくように、様々な取り組みを行っている。

自主学习

自主勉強ノートを使って、漢字や計算練習、その日に習ったことの復習、新聞記事を活用した学習など、自分で内容を工夫しながら、毎日、自主学习を積み重ねている。ノートの使い方や学習内容において工夫が見られるノートは、全児童の参考となるよう自主学习コーナーに掲示しており、1年生の児童もお互いに学び合いながら、工夫して自主学习を進められるようになった。



家庭での音読練習

保護者の方に音読練習を聞いてもらうようお願いし、児童の意欲や表現力の向上をめざしている。音読カードの使用や練習してきたことをみんなの前で発表する場の設定により、意欲をもって音読練習に取り組むことができている。



「家庭読書の日」の設定

毎週土曜日を「家庭読書の日」に設定し、学校だけでなく家庭においても自ら読書に親しもうとする姿勢を育てている。継続することにより、本を借りて帰って読む習慣が身につき、徐々に児童の読書冊数が増えてきた。



家庭学習チェック

学期の始めと終わりに「家庭学習チェック表」をもとに家庭と連携しながら学習チェックを行い、個々の児童の学習状況を把握している。



「学力向上だより」の発行

学力向上における学校の取り組みや家庭学習調査結果などを載せ、家庭へ情報を発信している。学校での取り組みや結果を保護者の方にも知ってもらうことにより、家庭と連携した家庭学習習慣をつくることができた。



このように、児童の実態に応じた活動に取り組むことにより、互いに協力し、学び合う姿勢が育ってきた。また、自ら学び自ら考える力や自分の思いや考えを豊かに表現できる力、友だちの意見や発表をしっかりと聞く力など身につき、確かな学力の向上につながっている。

(2) 体力向上プロジェクト

① 体力づくり

朝の活動では、週2回体力づくりを取り入れ、体づくり運動や一輪車練習を行っている。

また、放課後、スクールバスを待っている時間を利用し、中学生と一緒にマラソンをしている。その後は、全校児童で鬼ごっこや昔遊びなどの様々な運動遊びを楽しんでいる。

月	火	水	木	金
読書	朝会	祖谷っ子議会	体力づくり (一輪車)	体力づくり
				金暗唱発表



② 合同体育によるめあて別学習

体育の時間においては、水泳や器械運動などは3～6年生合同で授業を行い、約30名の子どもを4名の教員が指導している。例えば、水泳学習であれば、「めざせ25mコース」「クロールコース」「平泳ぎコース」「タイムチャレンジコース」の4つのめあて別にコースを分けて学習を進めた。子どものめあてに応じた指導が可能になり、子ども一人ひとりに関わる時間が増え、技能の向上を図ることができた。



このように、全校をあげての様々な取組や、小・中学生が共に活動することにより、運動する楽しさを味わい、進んで運動に取り組む児童が増えてきている。また、少しずつ運動技能も向上してきた。

(3) ふるさと大好きプロジェクト

① 地域の特産物の栽培活動

本年度は、東祖谷の地域に根付く産物として、じゃがいもとそばを栽培する計画を立て、実践している。祖谷のじゃがいもは、「ごうしも」と言われ、小さく身が締まっていてとてもおいしい。地域の方に協力していただき、苗植えや土寄せ、収穫などに取り組んだ。収穫したじゃがいもを使って、田楽やじゃがいもピザを作り、おいしくいただいた。

また、じゃがいもを掘ったあとの畑には、そばを栽培し、秋には、そば打ち体験を行った。

地域の方から、そばの打ち方やそばの専門的な事柄について分かりやすく教えていただき、郷土の味に親しみを感じながら味わうことができた。



② 地域の自然や伝統の体験活動・交流活動

総合的な学習の時間などにおいて、ふるさとの希少植物であるイヤギボウシの保護活動や重要伝統的建造物群保存地区に指定された落合集落についての調べ学習など、地域の自然や伝統を体験したり、調査したりする活動に取り組んでいる。

また、校区にあるデイサービスセンターや高齢者施設を訪問し、学習の成果を発表したり、いっしょにゲームをしたりして地域の高齢者の方々との交流も図っている。



このような地域の特色を生かした体験的な活動を通して、地域の自然や人とのかかわりのすばらしさなど、ふるさとのよさを再確認することができた。また、地域の広がりにより学びが充実した。ふるさとを愛し、大切にしようとする態度が育ってきたように思う。今後も、ふるさとを誇りに思う子どもたちを育てていきたい。

4 小・中学校の連携

本校は、小・中学生が同じバスで通い、1つの校舎で共に生活しているという大きな特色がある。すべての子どもたちの健やかな成長のために、全教職員が一丸となり、どのような小・中連携のあり方が必要かを模索しながら、日々、教育活動を進めている。

年度当初は、小学校と中学校の文化の違いや児童生徒の発達段階の違いなどから、なかなかうまく進まないこともあった。



しかし、小学1年生から中学3年生までの9年間を見通したよりよい教育活動を進められるよう「小中連携教育」を推進し、中学校を卒業するときによいような力を身につけるべきかを考えた教育をめざしている。

(1) 小中連携教育

① 連携体制づくり

様々な教育活動や学校行事などを円滑に進められるように、小中合同での企画委員会や職員朝礼を行っている。企画委員会では、月の学校行事や合同での活動・研修などについて検討し、実践へとつなげている。全体のことを考え小・中それぞれの立場から、話し合うことができ、小中の連携を図りやすい体制をつくることができた。

また、校内研修においても、子どもたちの様子について話し合う場をもち、児童生徒理解が図れるようにしている。小・中同じ職員室では、教職員の会話の中にも、普段の子どもの様子や変化について話題があがるので、自然と連携しやすい環境もできた。



【企画委員会】



【校内研修】

② 授業の乗り入れ

「中1ギャップ」といわれるように、小学6年の学級担任制から中学1年の教科担任制への移行は、子どもたちにとって大きな壁であると考えられる。小中連携教育の課題の1つは、それをどう乗り越えるかだ。

授業の乗り入れについては、本年度は、中学校の音楽担当教諭が小学校高学年の音楽の授業に入り、中学校免許をもった小学校教諭が、中学校の家庭科の授業を行っている。学習内容や役割などを事前に相談し、計画的に学習指導を進めている。また、2学期には、6年生の理科「月と太陽」の学習を、理科の専門である中学校の教頭が授業を行ったり、中学生の書写の授業を小学校の教頭が行ったりした。理科の授業では、教具を使って説明したり、中学校での学習内容にも少し触れたりしながら分かりやすく教えてくださった。授業後は「教頭先生に教えていただいて、まずびっくりしたことは、質問したことや教科書に載っていないこともすぐに教えてくださったこと。」という児童の感想が多くあった。授業の乗り入れにより、児童生徒理解、系統的な学習指導、「中1ギャップ」の解消などの効果が期待できる。

他にも、人権教育や道徳、総合的な学習の時間などは、各担当を中心に全教職員で年間計画を検討し、9年間を見通した計画的・継続的な学習指導を行えるように準備を進めている。



【小学校での音楽科の授業】



【中学校での家庭科の授業】



【小学6年生での理科の授業】



【中学2年生での書写の授業】

③ 小中の交流活動

日常生活においても、児童生徒が自然な交流ができることをめざして、合同での活動や交流する場を設定してきた。例えば、6月には、中学校の保健給食委員会と小学校の児童会が中心となって、合同の食育集会を開き、紙芝居や〇×クイズを楽しんだ。食育集会後、「中学生と一緒にドキドキしたけど、とても楽しかった。次は、緊張せずに話しかけたい。」という児童の感想があり、児童生徒が徐々に交流できるようになっていたようだ。



【食育集会】

また、避難訓練や運動会などの学校行事は、合同で行った。特に今年度の運動会は、9月に新しく開所した東祖谷保育所の子どもたちも一緒になり、東祖谷保育所・小学校・中学校連合の運動会が初めて開催された。かわいい保育所児の演技、どの競技にも一生懸命だった小学生、リーダーシップを発揮した中学生。みんな元気いっぱい、笑顔いっぱいで、東祖谷が活気に満ちあふれた一日だった。



【人権意見発表会】

ほかにも、5・6年生と中学生と一緒に薬物乱用防止教室や人権意見発表会を実施したり、小学1年生が中学生に学習の成果を発表するなどして、小・中学校の壁を取り除き、スムーズな接続ができるように努めている。



【中学校での乗り物発表会】



【連合運動会】



【避難訓練】

(2) 教職員の研修

① 小中一貫教育先進校視察

愛媛県四国中央市にある新宮小・中学校は、「小中一貫教育」の先進校である。5月末に、本校の教職員数名が視察に行き、いろいろと教えていただいた。その後、校内研修で報告会を行い、小中一貫教育の概要や組織などについて、共通理解を図った。



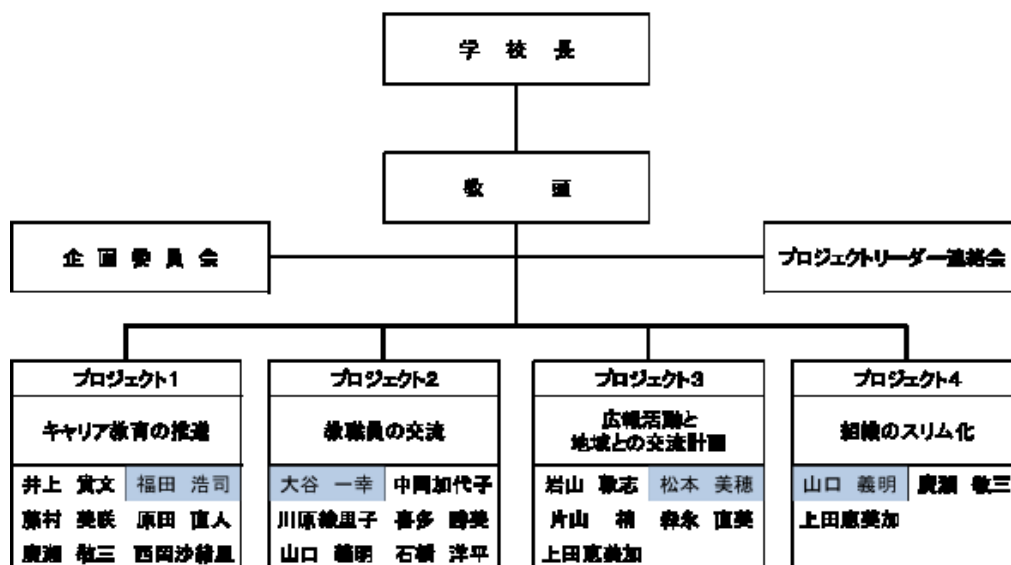
② 教職員の意識の変容

6月には、ブレインライティング法を用いて「小中連携でどのような取り組みができるか。」というテーマで合同の校内研修を行った。グループごとに話し合い、学校行事や活動、校種間の交流などについて、様々な意見が出てきた。

そして7月には、それらを具体的にプロジェクト化していくための組織づくりをして研修を深めた。小中連携を進める柱をかけ、各部会で話し合い、来年度の教育活動に向けての取組を進めている。



研究組織図



それぞれのプロジェクトリーダーです。

③ 合同研究授業

小学校での研究授業や研究会に、中学校の先生方にも参加していただいた。活発な意見交換が行われ、共に研修を深めることができた。また、参観授業など、様々な機会において授業を公開し、指導力の向上に努めている。

他にも、職員室には「教科書・指導書コーナー」を設け、小中それぞれの教育課程や指導目標・内容などをいつでも調べられるようにしている。

小中の教職員が一丸となり、資質の向上や情報の共有化を図りながら、小学校で積み上げてきた力を、中学校でさらに伸ばせるように工夫し、学力の定着を図れるようにしていきたい。



5 成果と課題

試行錯誤しながらの1年間ではあったが、順調なスタートをきり、子どもたちの健やかな成長のための教育実践ができつつあるように思う。

様々な活動を振り返った子どもたちの感想では、「友だちがいっぱい増えて、とても楽しくなった。」という子がほとんどだった。また、「中学生との交流があって楽しい。」という感想もあった。日常生活において、小学生が中学生と自然に交流することができるようになってきたようだ。共に過ごす中で、小学生は、中学生にあこがれをもち、中学生は、年下の子に優しく接しながらリーダーとしての自覚も芽生えつつある。

授業の乗り入れや交流することにより、中学校での教育活動を身近に感じ、「中1ギャップ」解消にむけての効果が見られた。たくさんの仲間や中学生と共に笑顔で過ごしている子どもたちの様子からは、小学校の統合と小中連携により、様々な学習や活動が活性化し、子どもたちの学習意欲が向上したことが分かる。何事においても、小中の教職員が協力して取り組むことが多くなり、教職員の連携意識が高まったことが、小中連携教育を進める上では、とても重用であると実感した。

また、7月に立ち上げた研究組織においては、各プロジェクトにおいて何度も話し合いを重ね、来年度に向けての試行・実践を行ってきた。6年生における一部教科担任制に向けての授業の乗り入れや小中の交流活動の推進、学校新聞の一本化、校舎内における「地域ふれあい通り」の設置などは、その成果であると思う。

しかし、小中連携において、まだまだ課題はたくさんある。例えば、キャリア教育的な視点での行事・教育活動の見直しや校種間の相互理解による、さらなる小中連携の充実、などがあげられる。また、小中連携教育を進める上で、9年間を見通した年間計画の作成も必要だ。15歳までの子どもたちが同じ時間と場所を共有するという東祖谷小・中学校でしか体験できない特色を最大限に生かし、計画的・継続的な教育計画を作成していきたい。ほかにも、地域の教育力を生かすために、どのように地域ボランティアを有効活用するかという課題もある。家庭や地域との連携もさらに密にした教育活動を展開していかなければならない。

今後は、先に述べた組織を中心に、それぞれの課題に対して具体的にプロジェクト化できるように、さらに研究・実践を続けていきたい。

6 おわりに

これまでの取組の成果を生かし、これからも全職員が、9年間を見通し、「知・徳・体の調和のとれた心豊かな児童生徒を育てたい」という強い思いをもって指導していきたいと思う。そして、小中連携教育の中で子どもと共に教職員も成長できるように、今後も教育活動を進めていきたいと考える。

本校の研究はまだまだ道半ばではあるが、様々な変化や困難を「ピンチ」ではなく「チャンス」ととらえ、さらに特色ある学校づくりができるように、日々の教育活動に取り組んでいきたい。



研究主題

人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 ～ E S D（持続発展教育）の視点を取り入れて～

池田中学校 教諭 丸岡 美枝

1 はじめに

池田中学校は、徳島県西部、周囲を山々に囲まれた自然豊かな地域に位置している。この地域は、年々生徒数が減少し、平成21年春に旧池田中学校と池田第一中学校を統合して生まれた現在の池田中学校は、創立4年目の新しい中学校である。

この4年間、統合前の2校が築いてきた伝統の上に、新しい中学校としての教育活動を一步一步踏みしめるように実践してきた。想定していたこととはいえ、生徒数の増加、学



高台から池田中学校を望む

（左手奥の建物が池田中学校で手前は池田高校）



現在の池田中学校

習経験と既習事項の違う生徒が共に学ぶ環境、校区の拡大など、統合に伴う変化は教育活動のあらゆる面に影響を及ぼした。しかし、生徒も職員も保護者も、統合による変化を肯定的にとらえ、新生池田中学校としての校風を確立させようとそれぞれの立場で努力してきた。今年3月には統合の年に入学した生徒たちを卒業させ、4年目の今年は、より池中らしさを追求した教育活動を展開しようと取り組んでいる。

※池田中学校のHP <http://www.miyoshi.ed.jp/ikedachu/>

2 研究の目的

1) E S D（持続発展教育）について

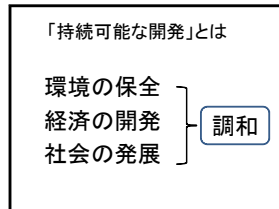
「E S D」とは、「持続可能な開発のための教育」と訳される「Education for Sustainable Development」の頭文字を取った言葉である。1992年の国連環境開発会議（地球サミット・リオサミット）の行動計画に、その重要性が盛り込まれ、その後、国連総会で日本が「E S Dの10年」を提案し、満場一致で採択された経緯がある。日本では平成18年に実施計画を策定している。

文部科学省は、日本におけるESDを次のように定義している。

「持続可能な社会の実現を目指し、私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、よりよい社会づくりに参画するための力を育む教育」

また、E S Dの背景を次のように説明している。

「地球規模の環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全が問題化されている現代において、人類が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々により質の高い生活をもたらすことができる状態での開発を目指すことが重要な課題となっています。このため、個人個人のレベルで地球上の資源の有限性を認識するとともに、自らの考えを持って、新しい社会秩序を作り上げていく、地球的な視野を持つ市民を育成するための教育に期待が寄せられています。」



そして、E S Dの教育の範囲を、「環境、福祉、平和、開発、ジェンダー、子どもの人権教育、国際理解教育、貧困撲滅、識字、エイズ、紛争防止教育など多岐にわたる」としている。

学習指導要領は、総則の道德教育について述べる中でE S Dの理念を盛り込んでいる。(右参照)
※詳しくは、[文部科学省](#)や[環境省](#)のE S D関連のHPを参照のこと。

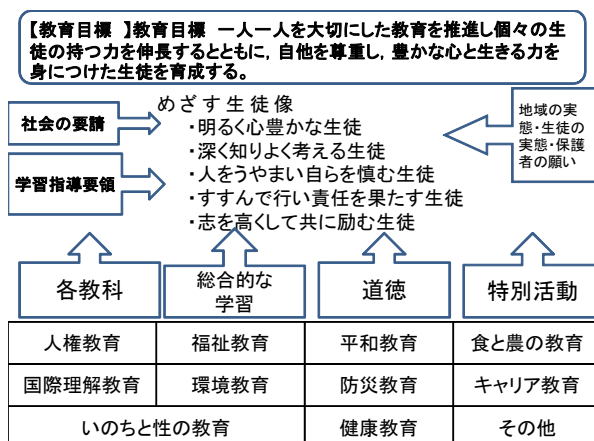
中学校学習指導要領総則

道德教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、**他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成**するため、その基盤としての道德性を養うことを目標とする

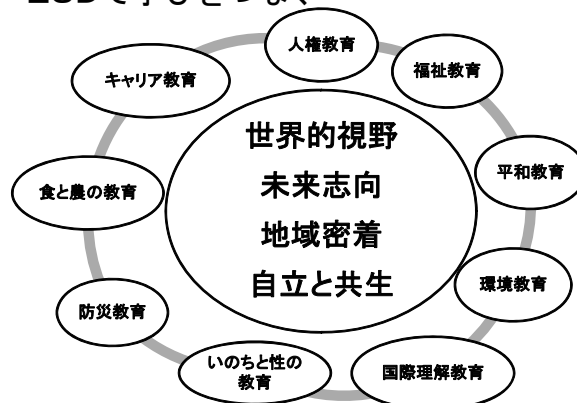
2) 本校の実態と課題

本校では、「一人一人を大切にした教育を推進し個々の生徒の持つ力を伸長するとともに、自他を尊重し、豊かな心と生きる力を身につけた生徒を育成する」という教育目標のもと、わかる授業、伸びる授業の実践に努めるとともに、総合的な学習や特別活動などでは多様な教育活動を展開してきた。それら一つ一つは、意図的計画的に行われているが、関連性・系統性という点ではまだ十分な構築ができていない。本来ならば周到な計画に基づいて実践するのが筋であるが、特に、統合1年目・2年目は、目の前に日々成長する生徒たちがいて一旦停止はできず、まさに「走りながら考える」状態であった。

そこで、持続発展教育（E S D）の原則や価値観を取り入れることが、本校の教育的課題を解決する足がかりとなると考え、「世界的視野・未来志向・地域密着・自立と共生」を基本に据えて実践に取り組むことにした。



E S Dで学びをつなぐ



3 実践の紹介

1) 現 3 年生の実践例

生徒たちが入学したのは、開校 2 年目の平成 22 年 4 月であった。この年は、池田中学校を会場として徳島県中学校教育研究大会（総合的な学習の時間）を開催した。また、翌 23 年度には、三好郡・市人権教育研究大会を開催した。われわれは、統合前の 2 校の実績を踏まえたうえで、これらの大会に向けての研究と実践を重ねてきた。その際、各教科・道徳・学活・総合的な学習を、E S D の視点に立って相互の関連性を図りながら取り組んだ。

① 福祉教育～平和教育～国際理解教育～人権教育



調べ学習の様子（H 2 2 年 6 月）



記者会見方式のプレゼンテーション（H 2 2 年 6 月）

1 年生（H 2 2 年度）の総合的な学習では、前期のテーマを「人を思いやり、互いに支え合う社会（福祉）」とし、急激な少子高齢化を始めとする地域福祉の現状を知り、2 度の福祉体験を経てヒューマンメッセージを発信するという活動の中から、共生や人への尊敬について学んだ。

【生徒の感想】

○私は、高齢者の福祉施設を訪問して、この前の道徳の授業を思い出しました。「危ないから」「何もしなくていいから」とすべてを取り上げるのではなく、自立を尊重することです。私も他人に支えられながら自分で生活するということが大切だと思います。

○私が行った高齢者施設の利用者の女性がクリームを塗って香水を付けていました。私はハッと気づきました。「人は人としてのびのびと生きたいのだ。年齢で差別をしてはいけない。」と思うようになり、「高齢者差別」について深く考えるようになりました。



福祉講座（H 2 2 年 6 月）



福祉体験（H 2 2 年 9 月）





ビデオづくり講座

(H22年9月)

協力：池田ケーブルネットワーク



ビデオ編集の様子

(H22年9月)



三好郡市人権教育研究大会での公開授業

(H22年10月)

生徒たちは、90秒のビデオ「ヒューマンメッセージ」を編集する中で、「福祉の心」とは特別なことではなく、身近な人への理解であり、心遣いであり、相互に支え合おうという共生の精神から生まれるものであるという福祉の根幹に気づいた。

この学びは、次の年の平和学習とそれに続く国際理解学習・人権学習へとつながっていった。

2年生(H23年度)の総合的な学習では、修学旅行と前後して「過去と現在・未来をつなぐ平和教育」を行った。6月には、徳島県国際交流協会やJICA四国の協力を得て4人の外国人留学生を招いて「平和を考えるワークショップ」を行った。ゲストの出身国の現状やそれぞれが考える「平和」の定義を聞き、生徒たちは、もはや地域限定の平和では持続可能な社会の構築はできないという認識を得るようになった。

平和を考えるワークショップ

(H23年6月)

ゲストティーチャーの出身国

- ・サモア独立国
- ・フィジー共和国
- ・インドネシア共和国
- ・ウガンダ共和国



協力

徳島県国際交流協会・JICA四国

【生徒の感想】

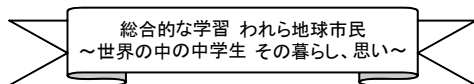
○今まで平和とは戦争がないこととしか思わなかったけれど、今は「違う国が互いに理解を深めることだと、自分なりの考えが生まれました。他の国の環境や習慣などの違いを理解し、共に平和に生きられる道を探るのが平和学習だと思います。

○「僕たちは今、本当に平和なのか」と考えてみました。確かに僕たちは不自由のない豊かな暮らしをしているけれど、僕たちは小さなことで争ったり、人を差別していて、そんなことをしては「本当の平和」にはならないと思いました。講師の皆さんがいていたように、相手のことを考え、理解することが大切だなと思いました。日頃の生活から相手のことを考え、行動したいと思います。

○異文化への理解・広い心などの平和の要素は、周りにたくさんあり、つくるチャンスにあふれていることに気づきました。

生徒たちのこの認識は、E S Dの基本的な考え方に迫るものであり、それが9月から始めた国際理解学習のベースとなった。

この学習では、まず世界10カ国について、それらの国の出身者や現地の学校関係者から聞き取りをしたり書籍やインターネットで調べたりして考えたことをポスターセッションで共有化した。その後、再び徳島県国際交流協会とJICA 四国の協力を得て、「世界を知るためのワークショップ」を開催し、世界的視野と責任ある行動、共生について考えた。



「国際交流ひろば」・・・世界各国から届いた情報を教室前の掲示板に貼りだした。中には、英語の返事もあった。(その下に日本語訳をつけた。)写真も豊富で、その国の様子がよく分かるし、他のグループとの情報の共有化が図れる。



海外青年協力隊の一員でモンゴルで理科の先生として活躍している平野輝美先生(千葉県出身)から、モンゴルの絵はがきやチョコレートなどをたくさん送っていただいた。中でも、占いに使う動物の骨でできたサイコロは、遊牧民の伝統をもつモンゴルらしい品物だった。(H24年1月)

集めた情報を整理し、そこから考えられることを話し合っている様子
(H24年1月)



ポスターセッション われら地球市民～世界の中学生、その暮らし・思い～

(H24年2月)

われら地球市民～世界を知るためのワークショップ～
2月21日(火)

国際理解について学ぶ総合的な学習の締めくくりとして、「世界を知るためのワークショップ」を実施した。三好市在住のボリビア人、森本ガビーさん、夫で元海外協力隊員の森本博幸さん、徳島県国際交流協会の川原恵子さん、JICA四国徳島デスクの中川朋子さんの4人をゲストティーチャーに招き、参加型の学習会（ワークショップ）を行った。



①ボリビア クイズ(森本ガビーさん)
③世界人口と富の配分(川原恵子さん)

②海外協力隊の経験から(森本博幸さん)
④グループ討議(30年後の理想の地球社会)

【生徒の感想】

○国際理解に関する講演会に参加して、僕が学んだことは一人一人の責任を持たなくてはいけないということです。・・・中略（富の配分のワークショップを体験して）・・・アメリカが世界一であることは知っていましたが、ここまで貧富の差が出ているとは思いませんでした。人類平等なんて言うのは言葉でしかなく、それが実現するまでには、途方もない時間がかかると思います。しかし、それを解消するには、先に述べたように、一人一人の責任感です。70億人といえども、ひと1人が集まっただけです。30年後の未来のために、日々責任感をもって生活していきたいです。

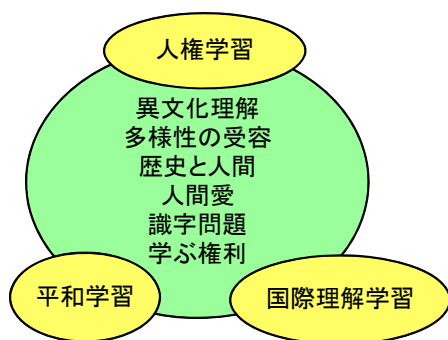
○印象に残ったのは、森本さんの「まずは自分のことから変えてみる」という言葉でした。私たちの班も、「自分のことを知る」をキーワードにしていたのでとても共感できました。いきなり「世界」と言われても、どうしていいかわかりません。だから、まずは、一番身近な自分のことを考えていくことが大切なのだと思います。自分→相手→みんな→日本→世界と、徐々に広げて、どの立場でも自分のことのように考えられることが私たちの理想とする社会への第一歩だと感じました。他にも、コミュニケーション力など、私たちがこれから身につけていかなければならない力はたくさんあります。自分という狭い価値観の中だけで生きていけば、「みんなが笑顔」という理想の社会は築けないと思います。何もかも自分で決めつけるのではなく、他の人の意見にも耳を傾けてみようとする心も、理想をかなえるためには、必要となってくるのだと思いました。川原さんの「もし世界が112人の村だったら・・・」の学習でも、世界はたくさんの課題を抱えており、私には関係がないとは言い切れない状況にまで陥っていると思いました。30年後、私たちが作っていく社会には、どんな未来が待っているのかは今の私たちの努力次第だと感じました。

○僕は将来人を助けたり支えたりする仕事をしたいと思っています。世界を変えるのは無理かもしれないけれど、自分を見直して基礎をしっかりとりたいと思います。・・・(中略)・・・今の自分たちの暮らしを当たり前と思わず、視野を広げて世界に目を向けていきたいです。今の世界の現場を知ることができてよかったです。

生徒の感想からは、本校のE S Dの視点である「世界的視野・未来志向・地域密着・自立と共生」が生徒自身のものの見方に根付いてきたことがわかる。

この国際理解学習と並行しておこなった人権学習では、中国残留日本人の家族として日本にやってきた少女の手記や、実際に同じような立場にいた県内の中学生の手記を教材として取り上げた。発展的な学習として、中国残留日本人の受けた苦難、戦後中国の人々がそれらの人々を支えてくれたことなどを学び、改めて人間愛や平和について考えた。さらに、識字問題と学ぶ権利の学習へとつながり、それが世界の国々について調べる国際理解学習にリンクするという学習の流れが生まれた。

なお、幸にも、昨年度徳島県国際交流協会に



勤務し、ゲストティーチャーとして招いた川原恵子教諭が本年度、本校に赴任し3年生の所属となった。本年度も国際理解学習を継続して実施している。



三好都市人権教育研究大会 (H23年11月)



モンゴルの遊牧民の生活をベースに自分たちの生活をみつめなおしたり国際協力について考える学習 (H24年6月)

②環境教育～国際理解教育～防災教育



暮らしと環境～始めよう3R～

講師：徳島県環境アドバイザー津川なち子さん

(H23年1月)

1年生(H22年度)の総合的な学習の後半のテーマは「自然を守り、自然と共に生きる社会(環境)」であった。身近な環境問題の中から生徒が自分の興味があるテーマ選び、調べ学習をしてレポートを作成した。また、環境首都とくしま創造センターに環境アドバイザーの派遣を依頼して環境講演会をもった。生徒たちは、環境問題に国境はないことを知り、ますます国際間の協力の必要性を強く思うようになっていった。

【生徒の感想】

〇3Rの事は、これまで曖昧だったけれど、今日、はっきりとわかりました。私はティッシュペーパーをととてもたくさん使っているの、少しでも減らせるようにしたいです。「沈黙の春」の中で出てきたように、春が来ても花が咲かないのはとてもさみしいと思います。だから、未来の人たちのためにも、私たちが今見ている物が将来も、全て見えるような環境を残していかなければと思います。

ここで学んだことが、2年生（H22年度）の国際理解学習の中で、地球規模の環境変化について考えるベースとなったことが生徒の感想からも分かる。

【生徒の感想】

○私たち先進国に住む人が地球温暖化の原因を作っているのに、その被害を受けるのは発展途上国の人だということはショックでした。それを防ぐために何ができるかを考えたとき、自分の無力さを実感しました。森本さんは、世界の国々の役に立ちたいと願いつづけていたから、大きな意味のある仕事ができるのだと思います。・・・（中略）・・・「一人一人の責任感」が大切だと思います。私たちは「地球市民」なので、自分の行動に責任をもって生活したいです。

このようにして培われた環境意識は、2年生での農林業体験学習、3年生での防災学習での今日的課題の発見につながった。



農林業体験（H23年11月）



防災学習（H24年7月）

【防災学習を終えての生徒の感想】

○毎年これだけの被害を出している台風はどうやってできているのかが分かりました。私たちは結果ばかりを見がちですが、地球温暖化など、根本的なことを知ることも「防災」につながると思いました。

③いのちと性の教育～人権教育～平和教育

現3年生は、自立と共生の視点から、1年生（H22年度）から「いのちと性の学習」を継続的に行っている。1年生ではジェンダー課題、2年生では命と多様性、3年生では非暴力と自己決定について学んできた。

一連の「いのちと性の学習」は、人権学習、平和学習と密接なつながりがある学習内容で、その時々学びが相互補完的、相乗的に働き、全体として学習の質を高めていった。



【生徒の感想】

○今回、性について学習してみて、性とは人間らしさなんだなあと思いました。・・・中略・・・また、「性は虹色」と先生が言っていた言葉の通りだと思います。「自分は自分だし、他人の物じゃない、虹のどの場所にいたっていいじゃないか」と思っています。

○人とつきあっていくためには、相手のことを考えることが大切なんだと思った。相手を尊重することは、自分の考えを押しつけないことだし相手の話を聞くことでもあるのだと思った。

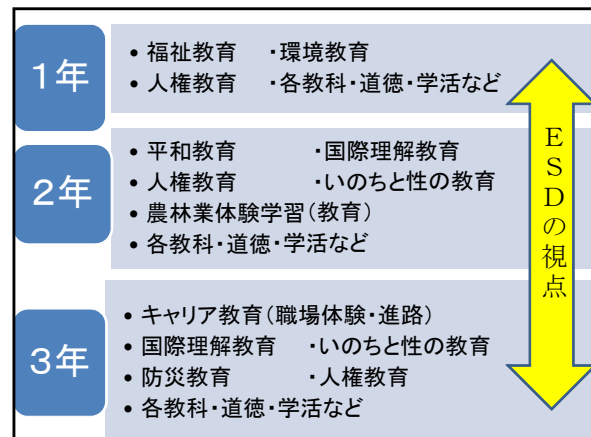
○自己決定権や言葉で伝えると言うことを大切に、怒りを暴力で表さないことが大切だと思いました。

2) 今後に向けて

現3年生は、以上のような学習活動をESDの視点に立つことによって、相互に関連づけながら展開してきた。

生徒たちの学習後の感想には、「持続可能な社会の実現を目指し、私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、よりよい社会づくりに参画」しようという意識が芽生えてきているように思う。

これらの学習活動は、評価と修正を加えながら次の学年へと引き継いでいる。



3) 1年生・2年生の実践例

本年度の1年生は、総合的な学習の時間に、「人と環境にやさしい社会作り」をテーマに、福祉について学習している。10月までは、校区である三好市を福祉の視点からとらえ、人にやさしい社会とはどのような社会だろう、また、そこに住んでいる自分たちにできることは何だろうということを、さまざまな福祉体験活動を通して考えてきた。11月からは、環境にやさしい社会とはどのような社会だろうかということテーマにして、環境について学習したり環境に関わる活動をしたりしている。

また、本年度の2年生は、6月に、社会や自分の中に形成されていたジェンダー課題を明らかにし、メディアの影響力や偏った見方に気づかせることで、一人ひとりが自分らしい生き方をしようというねらいで道徳の授業をした。次のような感想がみられ、生徒自身が既習の学習とのつながりをとらえられるようになっていることがわかる。



「歌の言葉で考えよう」(H24年6月)

【生徒の感想】

○自分の人生だから、人や理想に決めつけられるのではなく自分の考えを出して、自分で人生を決めるのがよいと思いました。この学習は人権学習につながっていると思いました。自分のおかしな考えや他の人の考えに合わせていじめや差別をしている、そういった考えに結びつくよい学習でした。

また、同じく、本年度2年生の人権学習では次のような感想が見られた。

【生徒の感想】

○物が生きている ということを初めて知りました。また、私もこの人が言っているように「その人と向き合い、相手の気持ちになって体をいたわることのできる人」になりたいです。この前、平和学習で「平和とは人の心の みがわかる人」と教わりました。この作文と、平和学習で学んだことはつながっている気がしました。相手の気持ちになって初めて人の心の みが分かるんだと思いました。

4) 環境教育

ESD に 必 の環境学習については、三好市オンリーワンスクールの取り組みとして「人と環境にやさしい学校づくり～地域の人や環境とのふれあい体験学習～」の推進に努めている。また、徳島県学校版環境 I S O の認定校としても、環境に負 をかけない学校づくりを目指している。

知識・技能面は、社会・理科・技術家庭科などの教科を中心にして、体験・実践的な面は、生徒会専門委員会の活動や環境サークル「ホテルと共に暮らし隊」による啓発活動を中心として取り組んでいる。

学校で環境教育をする意義の一つに、生徒たちの環境意識の高まりが、家庭、ひいては地域に波及することへの期待がある。本校の場合、池中祭で生徒会美化委員会が「ゴミステーション」を設置し、来校者にもゴミの分別の徹底を呼びかけたり、模 で



池田中学校玄関ホールの環境掲示板
(左の が1日1人あたりの水の使用量)



全校集会での節電の呼びかけ
(H24年6月)



池中祭のゴミステーション
(H24年9月)

出た 土を原料とした石けんを手づくりし、学校内で使うだけでなく家庭や地域にも配布している。石けんの原料を説明したうえで配布しているが、 土れがよく落ちると好評である。また、県立三好高校や地域のボランティア団体と共同で行っているサギソウの保護活動は今年で10年目を迎える。環境問題がボーダレスであることの裏返しとして、環境教育や環境保全活動も学校という 土根を取り除いて、家庭・地域との連携なしには前進しないという認識に立って取り組んでいる。



左：黒沢湿原のサギソウの保護活動
(三好高校・林業研究クラブ馬路ゆめ
いっばい会との協働)
(H24年6月)



上： 土せっけんづくり
(H24年6月)

4 成果と課題

以上のように、池田中学校では、統合によって生じた教育課題の解決のためにESDという 土的な概念を取り入れた。これにより、統合前の2校から引き継いだ様々な教育活動に一定の関連性や系統性をもたせることができた。生徒たちの発言やレポート、学習後の感想を見ると、複眼的な視点でものを見たり、未来への責任感や多様性への理解などが深まってきたりしていることがわかる。ESDのめざす「持続可能な社会づくり」のために小さな一歩を踏み出していると言える。今後ESDに本格的に取り組むためには、全体計画の構築が必要であるが、その基盤作りはできたと言えよう。

これからの課題としては、次の2点が挙げられる。

・ESDの全体計画の作成と評価

これまでの教育内容をESDの視点で捉え直して再構築した全体計画を作成し、継続的に取り組んでいきたい。また、評価のありかたについての研究も進めたい。

・ユネスコスクールへの対応

ESDに取り組む学校には、その推進拠点としてユネスコスクールへの加 入が求められている。手続きの 土雑さや申請から加 入までにかかる時間が長いこと、加 入するメリットなどの面から検討をし、今後の対応を考えたい。

※ユネスコスクールのHP <http://www.unesco-school.jp/>

5 おわりに

ESDが提唱されてから22年、「国連ESDの10年」の最終段階にさしかかった。持続可能な社会の実現のためには、教育・学習が中心的な役割を果たすことは間違いない。また、ESDの目指すところは、われわれが実践してきた「生きる力」を育む教育に直結するものであるという確信の下、「世界的視野・未来志向・地域密着・自立と共生」を基本に、今後もESDの理念に根ざした教育活動を展開していきたいと考える。

三好郡・市小中学校における情報モラル教育 ～学級担任アンケート調査と研究授業より～

三好教育研究所 研究員 山口 恭史
(現 昼間小学校 教諭)

1 はじめに

情報モラルは「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」のことであり、『小学校学習指導要領解説総則編』によると、「他者への影響を考え、人権、知的財産権など自他の権利を尊重し情報社会での行動に責任をもつことや、危険回避など情報を正しく安全に利用できること、コンピュータなどの情報機器の使用による健康とのかかわりを理解すること」等であることが記されている。

現在の情報社会において、小中学生も携帯電話やパソコンでインターネットを日常的に利用するようになったが、フィルタリング機能等を設定せず危険に対して無防備な状態で利用していたり、メールのマナーが守れず相手に迷惑をかけたりしている児童生徒も多いようである。インターネットは便利で学習や生活に役立つが、トラブルに児童生徒が関係したり巻き込まれたりする危険性もある。よって、教師や保護者が学校や家庭で児童生徒に情報モラルを指導し、身に付けさせなければならない。これらのことから、児童生徒の心と知恵の両方を磨くために情報モラル教育は必要不可欠であり、今後ますます重要になってくるといえる。

情報モラル教育は、10年以上前から学校で取り組みが始まり、研究や研修が続けられてきた。情報モラル教育の指導資料や教材が出版されたりインターネット上で公開されたりして、指導内容や方法等が紹介されてきた。三好郡・市の小中学校においても、ICT機器を活用した情報モラルに関する授業や指導、教職員の研修等が行われてきている。

そこで、三好教育研究所に勤務していた平成22・23年度の2年間、三好郡・市小中学校で情報モラル教育について行った調査や研究実践を報告する。

2 方法と結果

現状や実態を把握するため、三好郡・市の小中学校学級担任に情報モラル教育アンケート調査を実施することにした。そして、その結果を集計・分析し、課題を見つけ、自分も情報モラルに関する研究授業を小学校で行い、実践的に研究するという計画を立てた。

(1) アンケート調査

① 22年度アンケート

22年度は、マークシート方式の12問で、11月末、三好郡・市内の全小中学校の特別支援学級担任を除いた学級担任に情報モラル教育アンケートを実施した。学校ごとに配布したアンケート用紙に回答してくださった学級担任は195名で、9割以上の回答率だった。

このアンケート調査は、実際にクラスで道徳や学級活動、総合的な学習の時間の授業を担当している教頭や助教諭も含む学級担任を対象とした。集計した結果は設問ごと小中学校の合計数の割合を円グラフで表示した。

三好郡市 小・中学校学級担任 情報モラル教育に関するアンケート

回答欄の ① を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。【可：●●●／ 不可：●●●】

1 平成22年4月から11月末までに、あなたが行った情報モラル教育の授業や参加した研修等について、お答えください。

1 あなたは、本年度、何学年の学級を担任していますか。

① 小学校低学年 ② 小学校中学年 ③ 小学校高学年 ④ 中学校1～3学年

2 あなたは、4月から11月末までに、各教科の授業で情報モラルを取り扱いましたか。

① 1回取り扱った ② 2回取り扱った ③ 3回以上取り扱った ④ 取り扱わなかった

3 あなたは、4月から11月末までに、道徳の授業で情報モラルを取り扱いましたか。

① 1回取り扱った ② 2回取り扱った ③ 3回以上取り扱った ④ 取り扱わなかった

4 あなたは、4月から11月末までに、学級活動の授業で情報モラルを取り扱いましたか。

① 1回取り扱った ② 2回取り扱った ③ 3回以上取り扱った ④ 取り扱わなかった

5 あなたは、4月から11月末までに、総合的な学習の時間で情報モラルを取り扱いましたか。

① 1回取り扱った ② 2回取り扱った ③ 3回以上取り扱った ④ 取り扱わなかった

6 あなたの学級では、4月から11月末までに、外部講師による情報モラル教育の授業を行いましたか。

① 1回行った ② 2回行った ③ 3回以上行った ④ 行わなかった

7 あなたは、4月から11月末までに、参観日(オープンスクールも含む)に情報モラル教育の授業を行いましたか。

① 1回行った ② 2回行った ③ 3回以上行った ④ 行わなかった

8 あなたは、4月から11月末までに、情報モラル教育に関連する研究会や研修会(校内研修も含む)に参加しましたか。

① 1回参加した ② 2回参加した ③ 3回以上参加した ④ 参加しなかった

9 あなたは、情報モラル教育の内容について、理解していますか。

① よく理解している ② だいたい理解している ③ あまり理解していない ④ ほとんど理解していない

10 あなたは、情報モラル教育の進め方について、理解していますか。

① よく理解している ② だいたい理解している ③ あまり理解していない ④ ほとんど理解していない

11 あなたは、情報モラル教育についての指導資料や教材が充分あると思いますか。

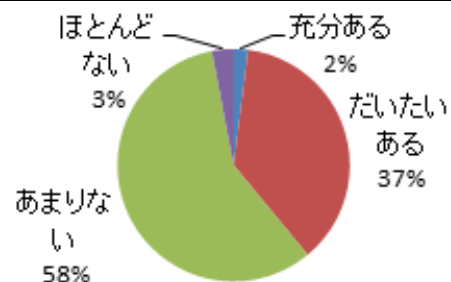
① 充分ある ② だいたいある ③ あまりない ④ ほとんどない

12 あなたは、情報モラル教育を何学年から始めれば良いと思いますか。

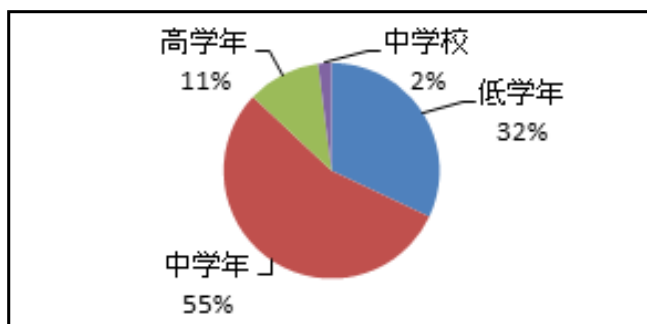
① 小学校低学年から ② 小学校中学年から ③ 小学校高学年から ④ 中学校1学年から

(平成22年度アンケート用紙)

22年度調査によると、グラフ①のように「情報モラル教育に関する指導資料や教材があまりないと思う」学級担任が58%と半数以上だった。23年4月からは、「事例で学ぶ Netモラル」などの教材が充分そろっていたので、23年度は三好郡・市の小中学校で利用可能な教材を使った研究授業を行うことにした。



(グラフ①情報モラル教育の指導資料・教材)



(グラフ②情報モラル教育の開始学年)

また、同じ調査より、グラフ②のように「情報モラル教育を始めたらいと思う」学年は低学年が32%、中学年が55%で高学年が11%だったが、小学校低学年から始めたらいと考えるので、23年度は低・中・高学年で児童の実態や発達段階にあった授業を行うことにした。

② 23年度アンケート

23年度は、三好教育会グループウェア「ミライム」で作成したアンケートをそのメッセージ機能で、小学校低・中・高学年・中学校の学級担任に一斉送信した。インターネットによる回答方法なので、回答期間は12月22日までの2週間に設定し、132名の回答があり、回答率は約7割だった。

回答方法は、2つまたは4つの選択肢から1つにチェックを入れ、匿名回答を選んで各自が送信する方法なので、マークシート用紙を印刷・配布して、マークを塗りつぶしてもらい、学校ごとに回収する方法より効率的である。

三好都市小学校高学年学級担任情報モラル教育に関するアンケートにご回答をお願いいたします。

[宛先] ... (全49人を見る) [送信日時] 11/12/09 11:29

三好教育研究所では、情報モラル教育の取り組み状況等を調べるため、学級担任の先生方にアンケートを実施し、研究を進めていきたいと思っております。
所要時間は約5分で、質問数は10問、質問期間は平成23年4月8日(金)から12月7日(水)までです。2学期末の大変お忙しい時期にご迷惑をおかけしますが、12月22日(木)までに、ご回答をお願いいたします。
なお、回答を送信する前に、匿名回答にチェックを入れてください。集計に当たっては、個人が特定されないように統計処理をしますので、ご安心ください。
また、このアンケートについて、ご不明な点、ご質問などがありましたら、研究所の山口研究員までご連絡ください。(TEL , E-mail)

山口恭史さんはこのアンケートの作成者です。
アンケート結果を見るにはコチラをクリックしてください。

あなたの学級では、情報モラルに関する授業を行いましたか？(必須)
外部講師による授業も含みます。
☐ 1回行った
☐ 2回行った
☐ 3回以上行った
☐ 行わなかった

あなたの学級では、「事例で学ぶNetモラル」の教材を使って、情報モラルに関する授業を行いましたか？(必須)
「事例で学ぶNetモラル」は、平成23年4月から三好教育会によって、三好都市全部の小・中学校で利用できる情報モラル教育コンテンツ(小・中学校用学習教材)です。外部講師による授業も含みます。
☐ 行った
☐ 行わなかった

あなたの学級では、外部講師による情報モラルに関する授業を行いましたか？(必須)
ICT支援員や教育関係者、携帯電話事業者なども含みます。
☐ 行った
☐ 行わなかった

あなたの学級では、参観日に情報モラルに関する授業を行いましたか？(必須)
オープンスクールや外部講師による授業も含みます。
☐ 行った
☐ 行わなかった

あなたの学級では、携帯電話に関する授業を行いましたか？(必須)
「携帯電話安全教室」など外部講師による授業や「春野家ケータイ物語」・「仮想携帯」などの教材を使った授業も含みます。
☐ 行った
☐ 行わなかった

あなたは、授業以外で、情報モラルに関する指導を児童に行いましたか？(必須)
朝の会や朝の会などの指導も含みます。
☐ 行った
☐ 行わなかった

あなたは、情報モラルに関する取り組みや内容を保護者に紹介しましたか？(必須)
学年通信や学年部会などでの紹介も含みます。
☐ 紹介した
☐ 紹介しなかった

あなたは、児童や保護者から携帯電話に関する問い合わせや相談を受けましたか？(必須)
☐ 受けた
☐ 受けなかった

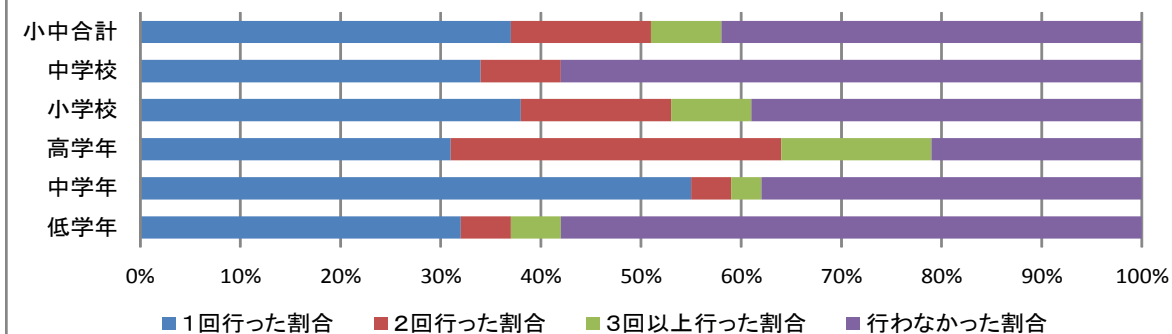
あなたは、情報モラルに関する校内研修や校外の研究会・研修会に参加しましたか？(必須)
出張以外で自主的に参加した研究会・研修会も含みます。
☐ 1回参加した
☐ 2回参加した
☐ 3回以上参加した
☐ 参加しなかった

あなたの学級では、「私たちと情報5年6年」のテキストを使って、情報モラルに関する授業を行いましたか？(必須)
「私たちと情報5年6年」は、新学習指導要領対応の改訂新版も発行された情報教育のテキストです。4年前に三好都市の小学校に、地教委から児童用初版テキストと教師用指導書が貸与されています。
☐ 行った
☐ 行わなかった

(グループウェアのメッセージ機能を使って、小学校高学年学級担任に送信したアンケート)

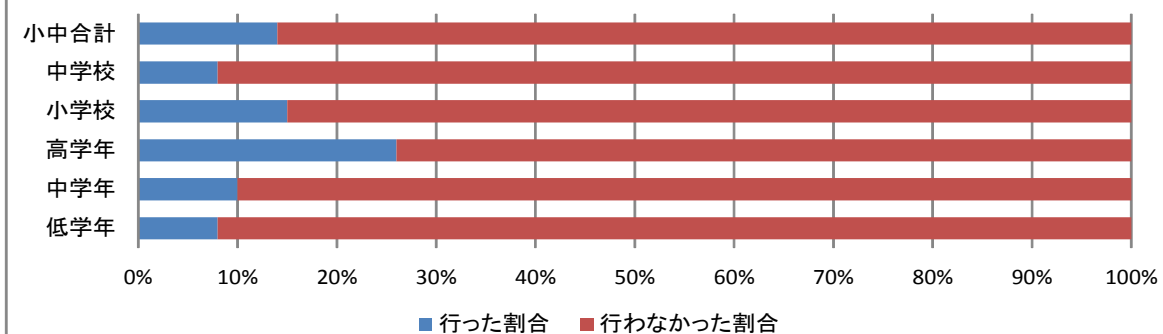
回答結果の割合を設問ごとに帯グラフで表示した。全10問の中から設問1～3、5～7のグラフを紹介する。

1 情報モラルに関する授業



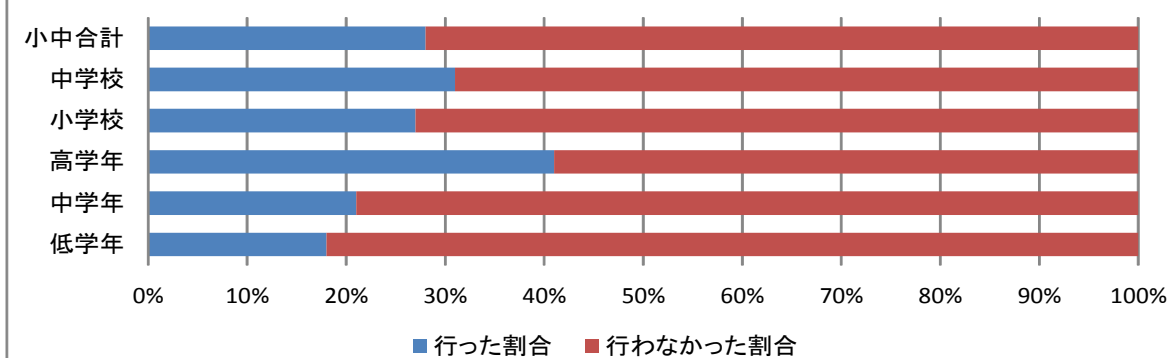
情報モラルに関する授業は小学校では学年が上がるにつれて多くなり、高学年では約8割であるのは、中学校より多くの教科等を担当していて授業しやすいからだと考えられる。

2 「事例で学ぶNetモラル」の教材を使った授業



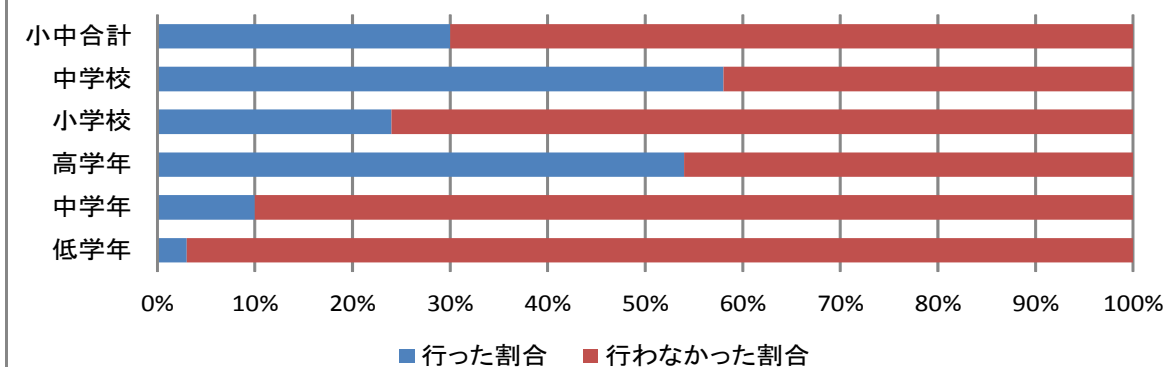
中学校学級担任が「事例で学ぶNetモラル」の教材を使った授業を行った割合が低いのは中学校用の教材が少なく、周知不足で利用方法が伝わっていないのかもしれない。

3 外部講師による授業



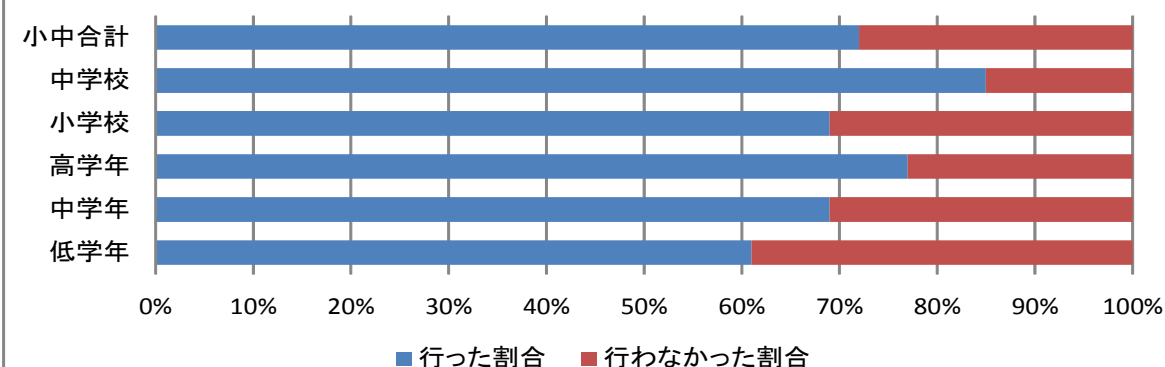
中学校では外部講師による授業が小学校より割合が高い。「携帯電話安全教室」の授業やICT支援員による情報モラルに関する授業も多く行われているようである。

5 携帯電話に関する授業



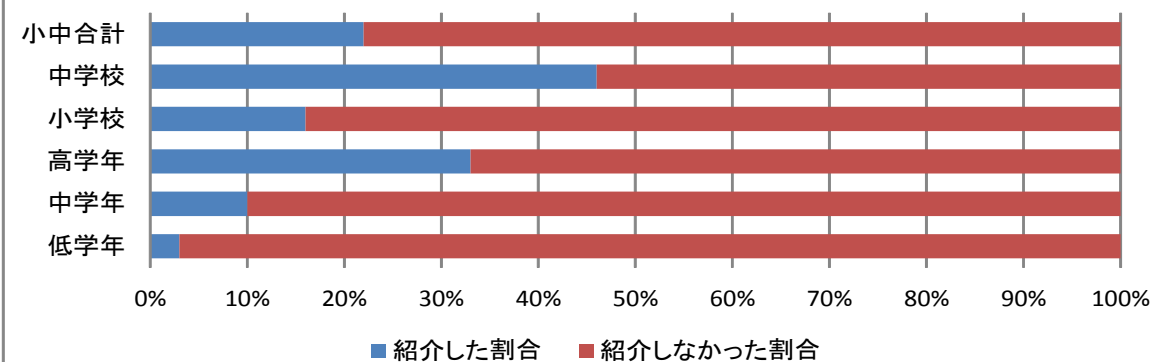
中学校で「携帯電話安全教室」などの携帯電話に関する授業が多く行われているのは、携帯電話の保持率との関連が予想される。高学年でも約5割と多く行われている。

6 授業以外の指導



中学校で授業以外の情報モラル教育の指導が85%と高く、小学校でも学年が上がるにつれて、高い割合になっている。朝の会や帰りの会などでの指導が多いと考えられる。

7 取り組みや内容を保護者に紹介



小学校から中学校へ学年が上がるごとに保護者への情報モラル教育の取り組みや内容の紹介の割合が高いのは、保護者に知らせる必要性が高くなっていくからだと考えられる。

（２）研究授業

① 22年度研究授業（１時間）

22年度は、所属校において高学年（５・６年複式）で学級活動の授業を行った。大分県教育センター情報教育部が2009年に発行した「情報モラル教育指導の手引き（小学校版）」の資料をWebページから印刷して利用した。「私の街コンクール」の資料を参考にして読み物資料とワークシートを作成し、ホワイトボードも児童に配布して、著作権についての授業を行った。

「私の街コンクール」の読み物資料のあらすじ

花子は住んでいる市のホームページの観光情報にあった写真を印刷して、模造紙に貼り付け、夏休みの自由研究として提出した。ところが、担任から「コンクールには出品できないかもしれない。」と言われて、花子は不思議に思った。

後半に、著作権情報センターのWebページ「楽しく学ぼう著作権」を大型テレビに映して、著作権（コピーライト）について、ノートパソコンを操作しながら児童に説明した。

最後に、復習として、プレゼンテーションソフトで作成した「著作権〇×クイズ」をスクリーンにプロジェクタで映して、児童に8問出題した。児童はほとんどの問題を正解していたが、その中の2問である。

著作権〇×クイズ(抜粋)

第1問 小学校1年生が描いた絵は、子どもが作ったものだから、著作権はない。〇か×か？

答え(×) 子どもが描いたものでも著作権で保護される。

第2問 まんがのキャラクターをマネして描いて、自分ひとりで楽しんだ。この場合は、著作権の違反になる。〇か×か？

答え(×) 自分だけが楽しむための複製は、著作権法第30条(私的使用のための複製)に該当し、著作権侵害にはならない。

※引用 「情報モラル教育指導の手引き(小学校版)」 大分県教育センター



ワークシート	名前()
(問題) 先生はなぜ、「出品できないかもしれないよ。」と言ったのでしょうか？ (自分の考え)	
(学習してわかったこと、思ったこと)	

(作成して使用したワークシート)

授業者は、児童が考えたり話し合ったりする活動をもっと多く取り入れるべきで、著作権フリーの場合もあることの説明不足だったことを反省した。

５・６年生からは「著作権は年齢に関係なくあることと、著作権があるので作者に許可を取らないといけないことを初めて知った。」という感想があった。

② 23年度研究授業（3時間）

A 高学年（5・6年複式）の授業

平成21年に各学校へ配布された情報モラル教材「春野家ケータイ物語」の第6話「情報は信じる前に裏を取れ」を使った。付属の指導資料を参考に、DVDのドラマと解説を視聴させ、ワークシートに書き込ませたり発表させたりしながら、所属校で5・6年生に「情報の信ぴょう性」についての学級活動の授業を行った。

「情報は信じる前に裏を取れ」のドラマのあらすじ

啓太はデートの前に携帯電話でインターネットの情報を調べた。そして、「若手お笑い応援ブログ」に掲載されたライブイベント情報を見つけた。その日に、ライブ会場へ彼女と行ってみると、誰もいない。ブログで確かめると、ライブは来月開催で1か月まちがっていたことをわびる文章があった。



授業者は、ブログの情報を Web ページだけでなく、新聞や雑誌など他のメディアでも調べて確かめる必要があるという指導が不十分だったことを反省した。

5・6年生からは、「ブログに書いていることは、間違っているときもあることがわかった。情報を信じる前に公式サイトなどをよく見て、正しいか調べたい。」という感想があった。

参観者からは、「5・6年生の携帯電話やインターネットの使用状況は様々だが、今後ますます携帯電話やインターネット、メールなどを使う場面は増えていくと思われる。そこで、今回のような情報モラルの学習は自分を守り、他人に迷惑をかけないためにも大変重要になると思う。」という感想があった。

低・中学年の授業に使った「事例で学ぶ Net モラル」の教材

平成23年度から三好教育会が三好郡・市の小中学校で利用できるよう契約している情報モラル教育の教材である。23年4月、各学校へ通知されている三好市・東みよし町のそれぞれのユーザ ID とパスワードを Web ページに入力すればログインできる。

児童生徒用と先生用があり、45分教材を選べば、多くの教材があり、映像クリップを視聴できる。ワークシートや指導資料を保存したり印刷したりすることもできる。また、短い時間で使用できるショート教材や校内研修教材なども用意されている。

B 低学年（2年）の授業

題材名は「個人情報を守る」で、「知らない人に自分や他人の個人情報を教えない」という学級活動の授業を前任校で2年生に「事例で学ぶ Net モラル」の教材を使って行った。

「知らない人に自分や他人の個人情報を教えない」の映像クリップのあらすじ

留守番をしている2年生のあさみに警察と名乗る人から電話がかかってくる。同じ学校の児童が交通事故にあったと言われる。あさみは聞かれるままに、友だちの名前と電話番号を教えてしまった。その夜、担任から電話があり、仲の良いクラスの子に変な電話がかかってきたことを知り、自分のせいかと不安になった。

授業者は、「迷惑電話」で実際に困っている教師の体験を具体的に話して、その大変さを児童に実感させれば良かったと反省した。

2年生からは、「知らない人から電話がかかってくる、住所・名前・電話番号などを聞かれても、だまされないようにして、個人情報なので教えないようにする。」という感想があった。

参観者からは、『ワークシートの設問が2年生にとっては少し難しかったと思う。最初に、「個人情報」という言葉を聞いたことがある児童がいたので、その言葉について教師がすぐに説明するのではなく、児童に発表させてから授業を始めれば良かった。』という感想があった。



C 中学年（3年）の授業

題材名は「著作権の概念を知る」で、「クラスのマークピーチくん」という学級活動の授業を勤務経験校で3年生に「事例で学ぶ Net モラル」の教材を使って行った。

「クラスのマークピーチくん」の映像クリップのあらすじ

みかは自分で描いたマークの「ピーチくん」がとても気に入っている。マークを描く宿題が出たが、思いつかないさやかは、仲良しのみかのマークを借りることにした。翌朝、みかが欠席したので何も話せず宿題を提出したさやかは、それがクラスのマークに決定しても、みんなに本当のことを言えない。翌々日、みかは知らない間にクラスのマークに「ピーチくん」が使われていることを知って泣いてしまい、その姿を見て、さやかは立ちすくむ。

授業者は、「著作権」の説明不足で、作者を知らない作品も無断で使って発表したらいけないことを指導できなかったことを反省した。

参観者からは、『映像クリップを使って事例を紹介するのは、とても効果的だったと思った。言葉だけの説明より視覚的に分かりやすいし、お話になっているので、身近に感じやすく、想像しやすかった。「著作権」などの言葉を教えるだけでなく、人の気持ちになりきって考えさせたり、自分ならどうか考えさせたりすることがとても大事と思った。』という感想があった。



平成23年12月1日(木)3校時
C小学校 第3学年 29名
指導者 山口 恭史

- | 段階 | 活動内容 | 指導上の留意点 | 資料・準備物 |
|-----------|-----------------------------|---|--|
| 導入
10分 | 1 「ピーチくん」に対する
みかの思いを考える。 | <p>○映像クリップを視聴させ、「ピーチくん」は、みかにとって、どんな思いを持ったマークか考えさせる。</p> <p>○みかには自分が作ったかけがえないマークであることを理解させる。</p> | <p>デスクトップパソコン</p> <p>大型テレビ</p> <p>VGAケーブル</p> <p>スピーカー</p> <p>ワークシート</p> |

展開 25分	2 みかが作った「ピーチくん」を借りたさやかの気持ちを考える。 3 「ピーチくん」を知らない間に、さやかに使われたみかの気持ちを考える。 4 さやかの望ましい行動について考え、著作権の概念を知る。	○思わず真似をしてしまうことがあることを理解させる。 ○自分が作ったものを無断で使われたときの、つらい気持ちを共感させる。	ワークシート ワークシート
終末 10分	5 著作権についての理解を深める。	○まとめの映像クリップを視聴させ、他人が作ったものを使うときには許可を得ること、自分が作ったものを使われたくないときには断ることができると理解させる。	デスクトップパソコン 大型テレビ VGAケーブル スピーカー ワークシート

- 5 評価の観点
- ・他人が作ったものを大切に扱おうとしているか。
 - ・著作物を守るために、著作権という権利があることを理解しているか。
- 6 使用教材・参考文献等
- ・情報モラル教育コンテンツ（小・中学校用学習教材）「事例で学ぶNetモラル」
先生用トップページ 45（50）分教材指導資料集
マニユアルシート・ワークシート
著作権：広島県教科用図書販売株式会社
著作年：2010年
 - ・「学校で取り組む情報社会の安全・安心」
編著者：堀田政也・平松茂
発行所：株式会社 三育堂
発行日：2010年9月10日

31

3 考察

情報モラルに関する指導について、教職員の個人差を解消するために、校内での研修や共通理解が重要である。情報教育主任を中心に、外部講師による講演会や校外の研修会の伝達講習を開いたり、研究授業や校内研修を行ったりして、教職員の意識を高めることによって、児童生徒に情報モラルを身につけさせることができる。各学校で年間計画を学年ごとに児童生徒の実態に応じて立案し、全教職員が協力して情報モラル教育に取り組み、着実に進めていくことが大切である。

なお、研究授業を行ってみて、情報モラル教育コンテンツやＩＣＴ機器を活用すれば、情報モラルに関する授業を気軽に効果的に行うことができることと、小学校低学年でも情報モラルに関する授業や指導は可能であることを実感した。

さらに、授業以外の情報モラルに関する指導も重要になってくる。朝の会や帰りの会など短い時間で使用可能な「事例で学ぶNetモラル」の「ショート教材」なども多くあるので、必要に応じて選択し、活用すべきであると考ええる。

また、携帯電話事業者など外部講師を招いて「携帯電話安全教室」を実施している中学校が多いようであるが、学校と家庭との連携や保護者への啓発が重要であるので、生徒だけでなく、保護者もいっしょに参加できるような配慮も必要であると思う。そして、今後は、小学校でも携帯電話を所有したり使用したりする児童が増え、携帯電話に関する授業や指導がさらに多くなってくることが予想される。

4 おわりに

23年度のアンケート調査は、グループウェアという新しいシステムを使って実施したが、三好郡・市小中学校学級担任全員から回答を得られるような工夫や配慮が不足していたと反省している。回答最終日の周知を徹底したり、回答しやすい早い時期に実施したり、回答期間を長くしたりすれば、回答率がもっと高くなったと思う。

最近の学校現場では、児童生徒に指導すべき事項や校務等が増加し、教師が必要を感じていても情報モラルに関する授業や研修を行う時間を確保しにくいと考えられる。この拙い原稿を読んでくださった先生方が情報モラルに関する授業や指導を行うときの参考に少しでもなり、もっと多くの先生方によって、情報モラルに関する授業や指導がさらに行われるようになることを願うとともに、自分自身も学校現場で情報モラル教育についての研究実践を今後も続けていきたい。

（謝辞）

本研究のアンケート調査にあたっては、平成22・23年度の三好郡・市小中学校学級担任の先生方に、研究授業にあたっては、三好郡・市小学校3校の先生方にご協力いただき、ありがとうございました。

（参考文献・引用）

- 『小学校学習指導要領解説総則編』, 2008年, 株式会社東洋館出版社, 68ページ
- 『情報モラル教育指導の手引き(小学校版)』, 2009年, 大分県教育センター, 35・36ページ

○文部科学省委託事業『ここからはじめる情報モラル指導者研修ハンドブック』，2010 年，財団法人コンピュータ教育開発センター（CEC）発行，4 ページ

（参考教材・Web ページ）

- 情報モラル教材「春野家ケータイ物語」，2009 年，NHKエデュケーショナル制作，独立行政法人メディア教育開発センター企画・発行，株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ協力
- 情報モラル教育コンテンツ（小・中学校用学習教材）「事例で学ぶNetモラル」，2010 年，広島県教科用図書販売株式会社著作 <http://www.hirokyou.net/netmoral/>
- 楽しく学ぼう著作権 <http://www.kidscric.com/>

研究主題

「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること

三好教育研究所 研究員 山下 達也

1 調査の目的

小学校外国語活動は、平成21、22年度の移行期間を経て、平成23年度より全面実施された。そして、平成24年度からはその外国語活動を経験した小学生が中学校で学んでいる。また、小学校の教材として、文部科学省より配布されていた“英語ノート”が平成24年度からは“Hi, friends”にかわった。

平成24年度は、人（児童・生徒）ともの（教材）に関して、大きな節目の年となったわけであるであるが、こういった時期を経た小・中学校の指導者がどのような考えや思いを抱いているかを調査し、今後の参考になればと願って今回の調査を実施することにした。

2 調査のあらまし

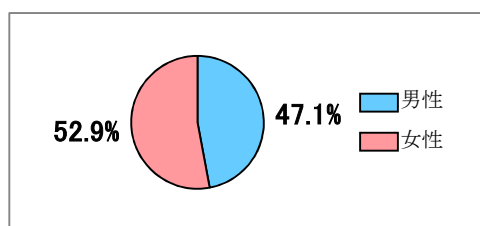
実施したアンケートは、2種である。1つは、平成23（または24）年度に外国語活動を行った小学校の指導者が対象で、もう1つは平成24年度に英語活動を行った中学校の指導者である。それぞれ51名、11名から回答があった。主な調査項目としては、小学校の指導者対象のものでは、“Hi, friends”の使用状況や児童の変容などを取り上げた。一方、中学校の指導者対象のものでは、小学校外国語活動への考えなどである。各調査項目ごとに、その結果と考察を行った。

なお、三好郡市の状況との比較には、「第2回小学校英語に関する基本調査2010（ベネッセ）」を使用した。

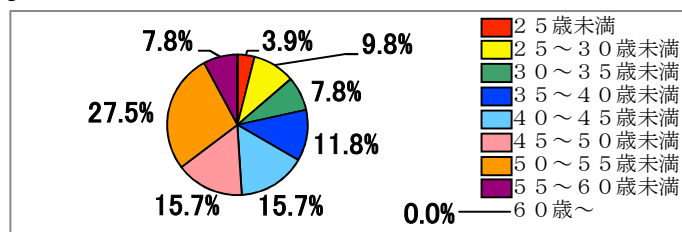
3 調査結果と考察

（1）平成23（または24）年度に小学校で外国語活動を行った指導者対象アンケート

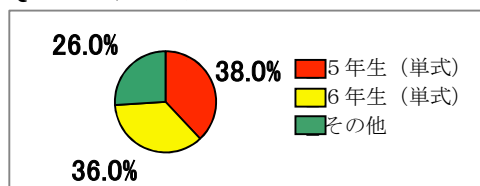
Q1. 性別



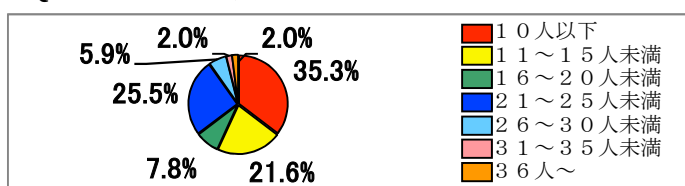
Q2. 年齢



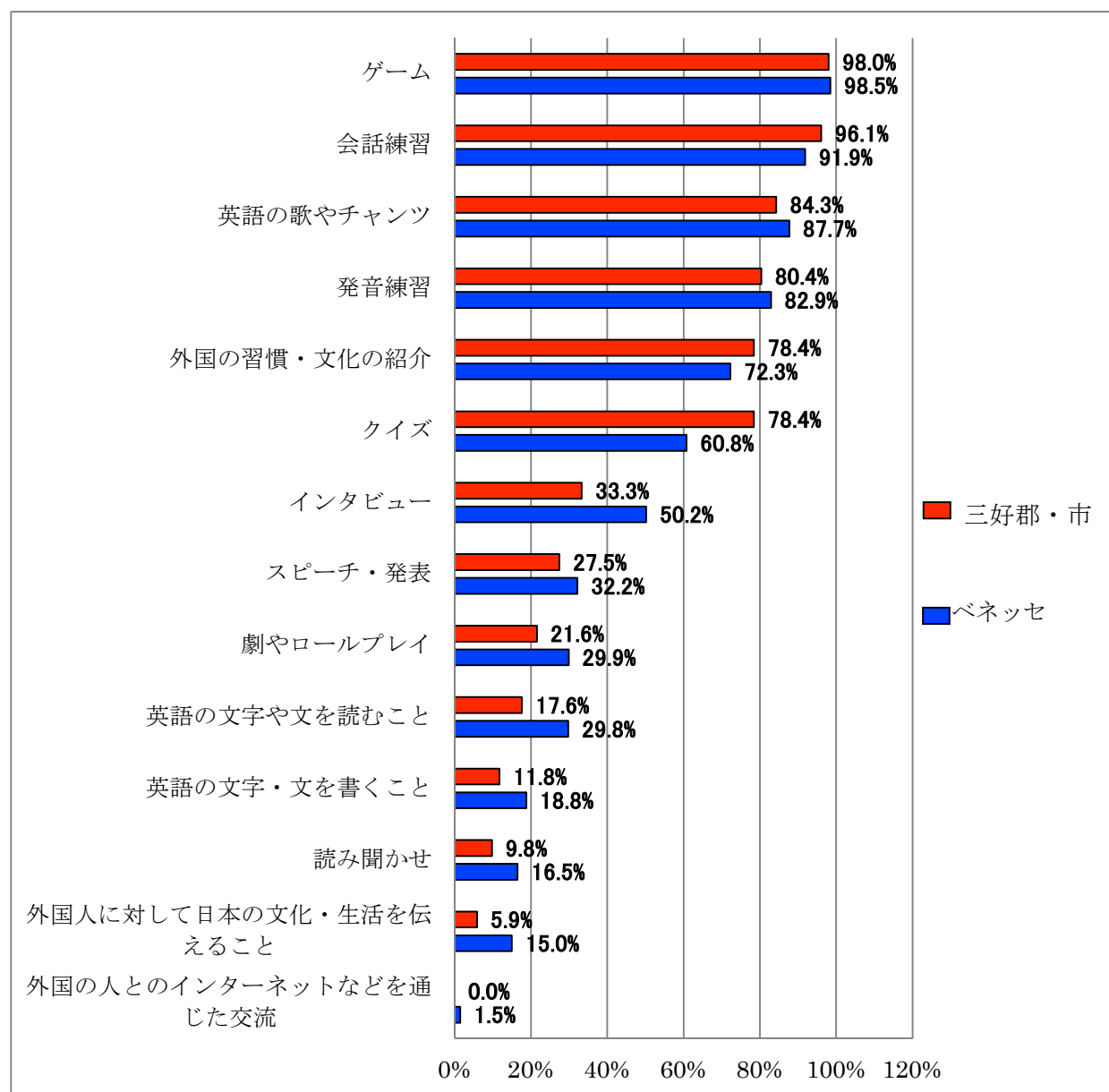
Q3. 担任学年



Q4. 学級児童数



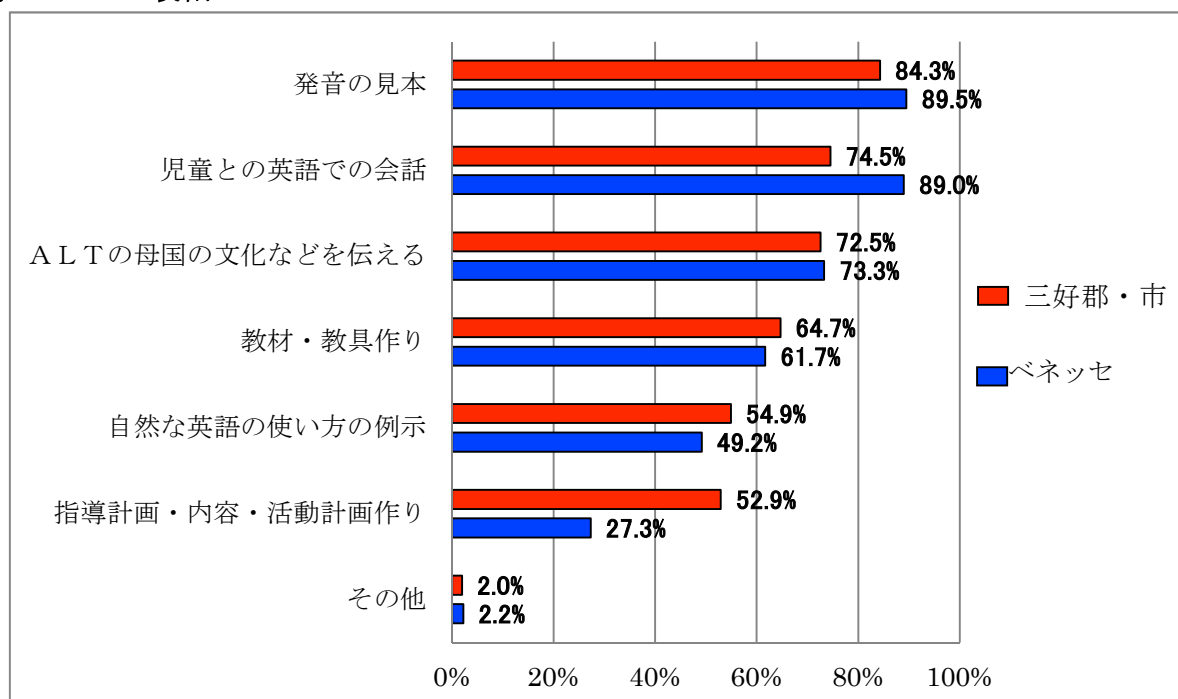
Q5. 外国語活動で行っていること



両アンケートとも、外国語活動で行っていることは、「ゲーム」「会話練習」「英語の歌やチャンツ」「発音練習」の比率が高い。つまり、英語を聞いたり話したりする音声重視の活動が中心と言える。それに対して、「読み聞かせ」「外国人に対して日本の文化・生活を伝えること」「外国の人とのインターネットなどを通じた交流」の比率は低い。

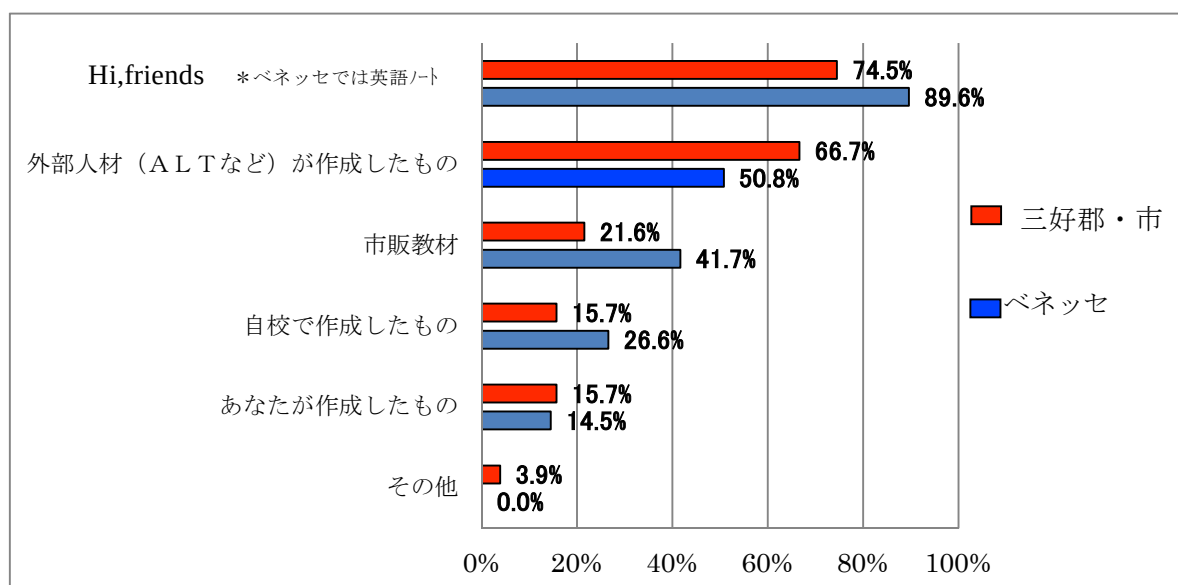
両アンケートで比率の差が大きいのは、「外国人に対して日本の文化・生活を伝えること」「英語の文字や文を読むこと」「読み聞かせ」である。

Q 6. A L T 役割



両アンケートとも、「発音の見本を示す」「児童と英語で会話をする」「ALT の母国の文化などを伝える」の比率が高い。つまり、英語が母語である ALT でしかできないこと（英語が母語ではない学級担任にはしにくいこと）が中心と言える。両アンケートで比率の差が大きいのは、「指導計画・内容・活動計画を作ること」である。三好郡・市では、指導計画・内容・活動計画作りににおいて ALT の役割が比較的高いと言える。

Q 7. 使用教材



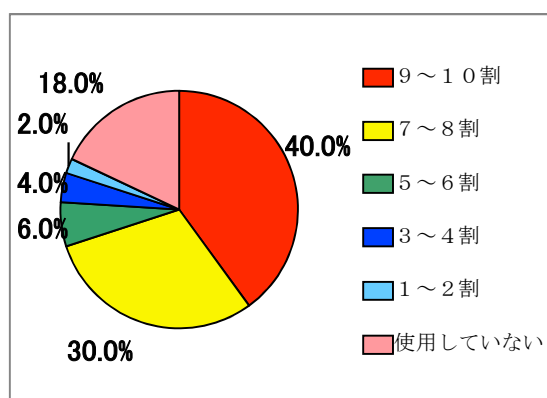
両アンケートとも、Hi, friends（ベネッセでは、英語ノート）の比率が高い。Hi, friends（英語ノート）は外国語活動の共通教材として文部科学省より配布され、学習指導要領の目標や内容に沿った

教材として広く浸透し、指導の拠り所として定着していることがうかがわれる。それに対して、「自校で作成したもの」「指導者（あなた）自身が作成したもの」の比率は低い。

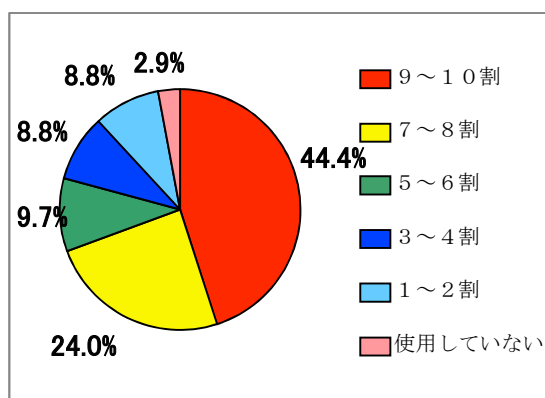
両アンケートで比率の差が大きいのは、「市販教材」「自校で作成したもの」である。三好郡・市では、市販教材を使用するほど共通教材 Hi,friends に対しての不都合を感じていない人の比率が高いと言える。

Q 8 . Hi,Friends の使用頻度（年間）

〔三好郡・市アンケート〕



〔ベネッセアンケート〕

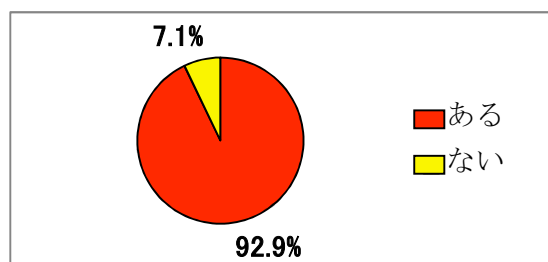


Hi,friends（英語ノート）を使用する割合は、「9～10割」が40%（英語ノートは44.4%）である。「7～8割」も合わせると、約70%となる。指導者の多くが、Hi,friends（英語ノート）中心の指導を行っている。一方、三好郡・市の場合は、「使用していない」「1～2割」の比率がベネッセアンケートに比べて高いが、これは5・6年生以外の学年の児童も含めた外国語活動の授業が多く、Hi,friends を使用した授業がしづらい状況を反映していると言える。

Q 9 . Hi,Friends について

便利なことや役立つこと

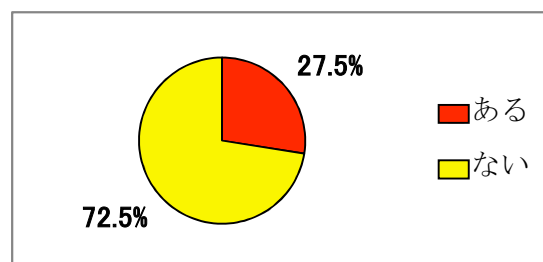
〔三好郡・市アンケート〕



Q 11 . Hi,Friends について

不便なことや不都合なこと

〔ベネッセアンケート〕



Hi,friends に対して、大変多くの指導者が便利な教材として認めていて、日々の授業におけるその有用さを認めている。ただ、Hi,friends に収められている機能を実際に使用する中で、いくつかの不具合に出くわしたりして、不便さを感じる指導者もある。

Q 10, 12. 便利・役立つことや不便・不都合なこととは（具体的に）

「便利なこと、役立つこと」について

「Hi, Friends を使ってみて便利なこと・役立つこと」をいくつかのキーワードで分類してみると、次のようになる。

●「（年間あるいは1時間の）指導計画の立てやすさ」に関して

- ・学習することが決まっているので、指導しやすい。
- ・指導の計画を立てるのに役立ったり、系統性がわかりやすい。
- ・学習の進め方がわかる。
- ・具体的な活動がわかる。
- ・外国語活動での活動内容が明確。
- ・カリキュラムがあるので、指導計画を立てやすい。
- ・学習を進めやすい。
- ・計画を立てやすい。
- ・いわゆる「教科書」なので、それに沿って学習ができる。
- ・Hi, Friends に沿って学習を進めることができる。
- ・自分で授業を組み立てる力量がないのでありがたく使わせていただいている。
- ・指導計画を作りやすい。
- ・ゲーム等、活動面で参考になる。

英語が本人の専門教科でないために指導において不安を感じる指導者にとって、指導計画が組まれているということは、それに沿って指導していけば一定のレベルの指導が可能となり、学級担任が単独で指導を行う上での指導者の負担を減らすという点で効果があると言える。

●「児童にとっての分かりやすさ」に関して

- ・デジタル教材を用いていて、わかりやすい。
- ・内容がわかりやすい。子どもが見てわかる。
- ・内容が、児童の発達段階に合っている。
- ・基本的な英語がたくさん載っているから、分かりやすく教えることができる。

「英語ノート」と比べて、5・6年用でそれぞれ20数ページ減ったが、その内訳は Let's Listen では5年生で2ヶ所、6年生で9ヶ所。Let's Sing ではそれぞれ2ヶ所。Let's Play では4ヶ所と2ヶ所それぞれ減っている。また、Activity は、19ヶ所と14ヶ所もそれぞれ減っている。一方、Let's Chant は4ヶ所と1ヶ所それぞれ増えている。このことは、活動の数を減らした分だけ活動によりじっくりと取り組めるようになったということであり、内容もより整理され、わかりやすくなったと言える。

●「活動内容」に関して

- ・わかりやすく、ゲームにも使える。
- ・ソフトや付属のカード
- ・教材のソフトの活用
- ・デジタル教科書や、CD-R に保存されている単語カードなどを利用している。
- ・アニメーション、音楽、音声

- ・自作しなくてもよく、時間が節約できる。
- ・みんな持っているので、使いやすい。カラーで見やすい。
- ・DVD が役立つ（チャンツ、動画）。
- ・カードなどの教材は付いているので、それを切ってそのまま使えたりすること。
- ・本もデジタル教材もよく練られたものだと思う。デジタル教材は毎回使い、チャンツなどの歌も慣れ親しむことができる。
- ・パソコンが発音してくれる。
- ・チャンツや例文がある。

英語ノートと比べて、Hi, Friends ではネイティブスピーカーの発音モデルやプレイングスキットなど、映像面の充実が図られたが、そのことが指導者にも実感できていると言える。その目的は、児童に英語の言い方をイメージさせ、友だちとの豊かなコミュニケーション活動を行わせることである。映像を見ることが授業の大半であったり、正確な発音を児童に求めたりすることは好ましくない。

●「児童の意欲・関心・楽しみ」に関して

- ・授業中、集中しやすい。
- ・イラストが多く、楽しみながら学習に取り組める。
- ・楽しく学習できるように内容が工夫されている。
- ・児童が興味を持っていて良い。
- ・子どもが楽しめるチャンツやゲーム形式のアクティビティーがある。
- ・児童が楽しんで無理なく外国語活動に取り組める。

カラフルなイラストが多く入っていて、子どもを飽きさせないようなゲームがあるということは、小学生にとっては特に興味を引くことであろう。

●「英語を話すことや発音」に関して

- ・音声などもたくさん入っているので、英語の発音などを聞かせる時に役立っている。
- ・発音とか楽しく理解できる。
- ・チャンツを利用して子どもが楽しく発声練習ができる。

日本人の指導者、なかでも小学校の指導者にとっては、発音などの音声面の正確さの面で不安な点があるが、簡単な操作で音声を生じたり、動くイラスト入りのチャンツを聞かせたりできることは、指導者の不安を減らしたり、児童に正しい音声、リズムを体感させるのに役立っていると言える。

●「英語の聞き取り」に関して

- ・外国人の人が発音している動画が見える。

この動画を児童に見せて発音させることも可能だが、指導者が口形をまねて練習する時により有効なのではないかと思われる。

●「英語の語彙」に関して

- ・文字もある程度覚ええられる。

- ・Hi,Friends に沿って学習していけば簡単な言い回しや単語などが覚えられるので、小学校の英語では、必要十分な教材である。

Hi,friends に出てくるアルファベットや単語について、表現や語彙数への不足感はないと言える。

「不便なこと、不都合なこと」について

●「（年間あるいは1時間の）指導計画の立てやすさ」に関して

- ・現在、複式。ALT と相談の結果、今年度はHi,Friends 2を使っている（来年度は、1）。そのため、現在の5年生はコピーで学習している。年度ごとに教科書を選べたらいい。
- ・実態に合わない時がある。
- ・内容を細かく書いているわけではないので、活動をしっかり考えておく必要がある。

指導者の自由度を高めるねらいもあって内容の細かさがなくなったのだから、指導内容については指導者自身が考えておく必要がある。ただし、Hi,Friends の中のものを全て行わなければならないのではないので、指導者が児童の実態に合わせて取捨選択していけばいい。年度ごとに教科書を選ぶことについては、現時点ではできないと思われる。

●「児童にとっての分かりやすさ」に関して

- ・英語以外は、難しさを感じる。

●「活動内容」に関して

- ・少人数のクラスでは、使いにくいゲームや活動があり、アレンジして使用しなくてはいけなかったことがあった。

ある程度の児童数を想定したゲームや活動なのでしかたがない。指導は自身で別のものを探してみるかアレンジするなどしなければならないだろう。市販教材も多数販売されているが、ゲームや活動についてはALT の持っているものを活用する手もある。

●「使い勝手」に関して

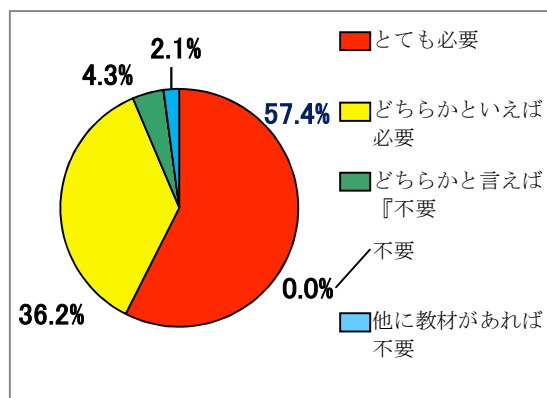
- ・教育系のパソコンでは動画やチャンツの映像が音とずれる時が多い。
- ・カード類の切り取り
- ・歌やチャンツによって、もう少しスロー・ハイのスピード調整ができると良いと思う。
- ・掲示資料がほしい。
- ・音声と映像が合わない時に、別の場面をクリックしなければいけないことが不便。
- ・学習カードが使いにくい。チャンツの「カラオケ」にすると、画像が出てこない。
- ・パソコンでうまく動かない時があった。

パソコンにインストールした Hi,friends を利用する場合には、どうしてもそのパソコンの性能に左右されることが多く、何らかの不具合が出る。映像と音とのずれの解決法については、すでに周知がなされているので指導者自身で対処できる。カード類の切り取り、歌やチャンツのスピ

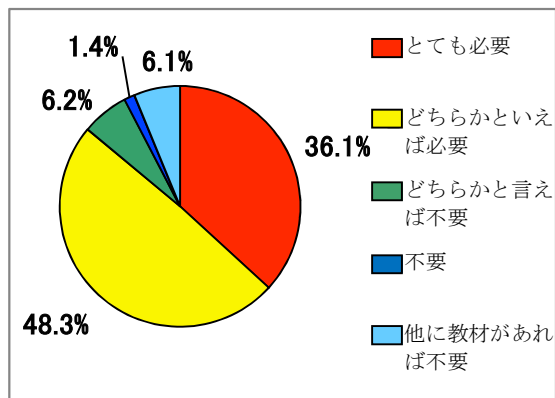
ード、カラオケ時の画像が用意されていないことについては、現時点では不便さは残ったままである。

Q 1 3. .Hi,Friends は必要か

〔三好郡・市アンケート〕

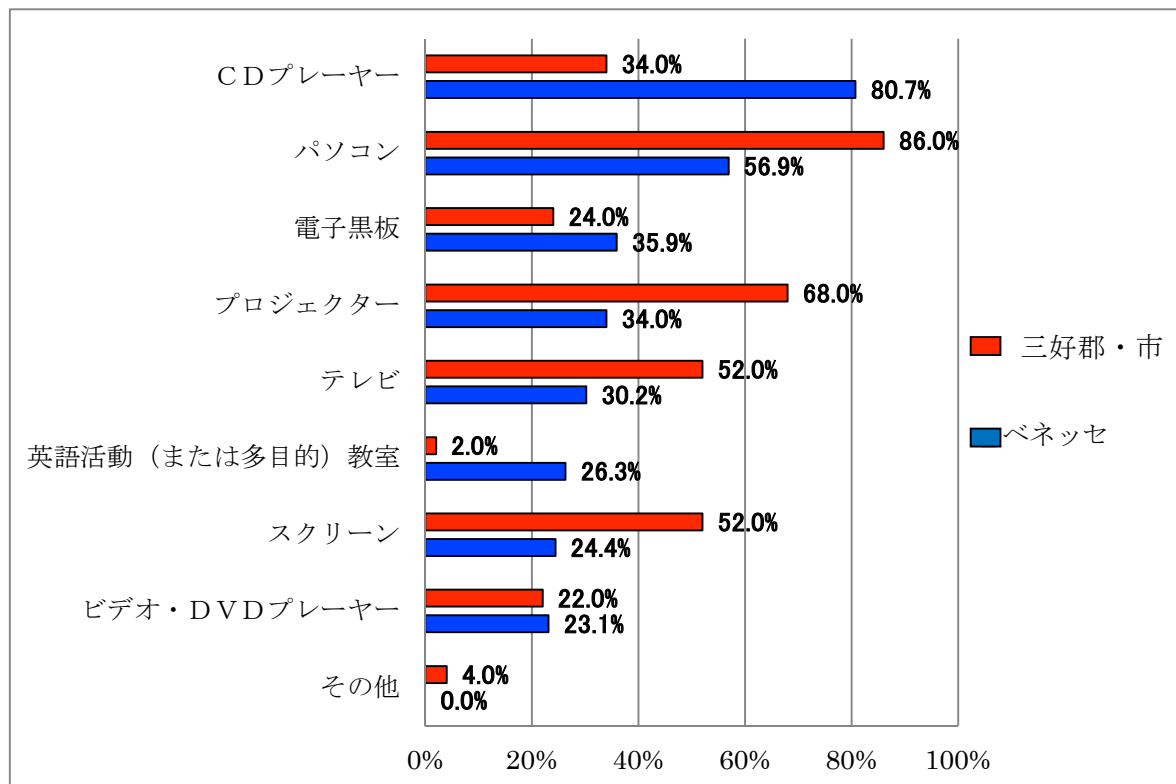


〔Benesse アンケート〕



「Hi,friends は必要だと思うか」の割合は、「とても必要」が約60%あり、「どちらかといえば必要」と合わせると、約95%である。指導者の多くが、Hi,friends の必要性を強く認めている。ベネッセアンケートでもほぼ同様であるが、三好郡・市の方がその傾向がやや強い。

Q 1 4. 使用機器



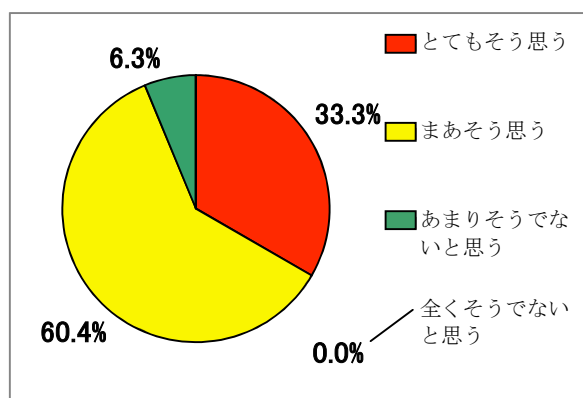
パソコン、プロジェクターなど、様々な機器が利用されているが、三好郡市とベネッセアンケートでは割合にばらつきが見られる。例えば、三好郡市で割合の高いのがパソコン（86%）、プロ

ジェクター（６８％），スクリーン（５２％）であるが，ベネッセではＣＤプレーヤー（約８０％），パソコン（約５５％），プロジェクター（約３５％）である。両者の差が大きいのは，三好郡市が多いものではスクリーン，プロジェクター，テレビであり，少ないものでは英語活動（または多目的）教室，ＣＤプレーヤー，電子黒板である。

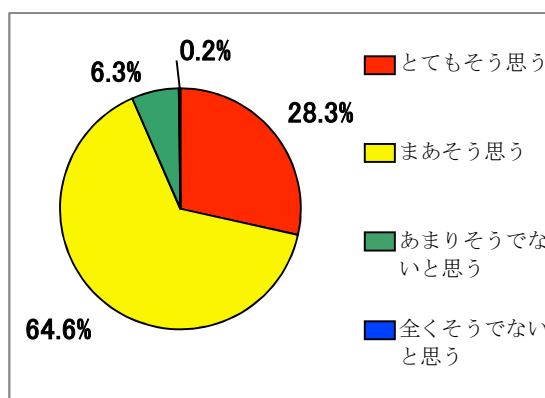
三好郡市では，パソコンをテレビまたはプロジェクター（必然的に，スクリーンも使用）につなげて活動を行うという定番といえるような形態がとられていると言える。

Ｑ１５．《児童に関して》英語に慣れ親しんできた。

〔三好郡・市アンケート〕



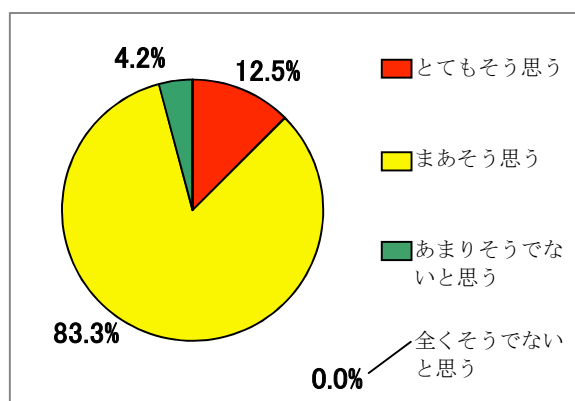
〔ベネッセアンケート〕



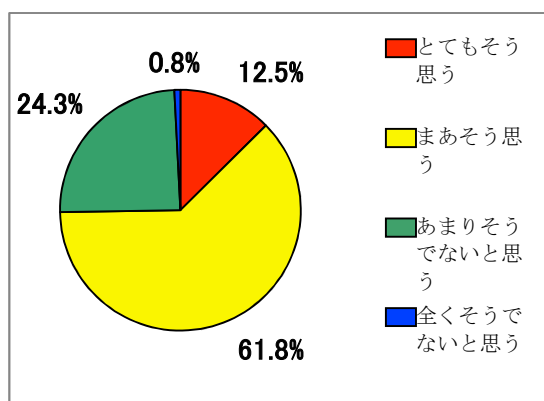
「英語に慣れ親しんできた」の割合は，「とても思う」が約３０％，「まあ思う」も合わせると，約９０％となる。指導者の多くが，児童の英語への慣れ親しみを実感している。このことは，ベネッセアンケートでも同様である。

Ｑ１６．《児童に関して》外国語や異文化への関心が増えた。

〔三好郡・市アンケート〕



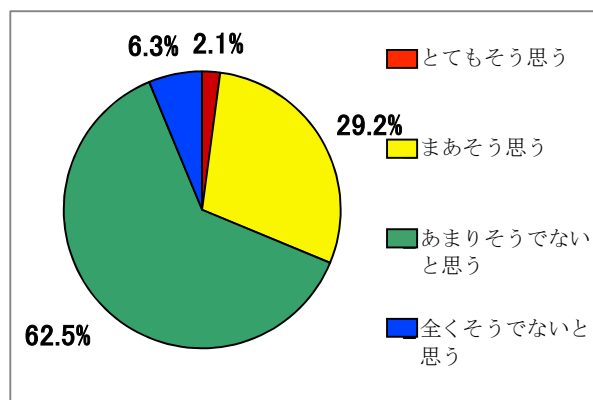
〔ベネッセアンケート〕



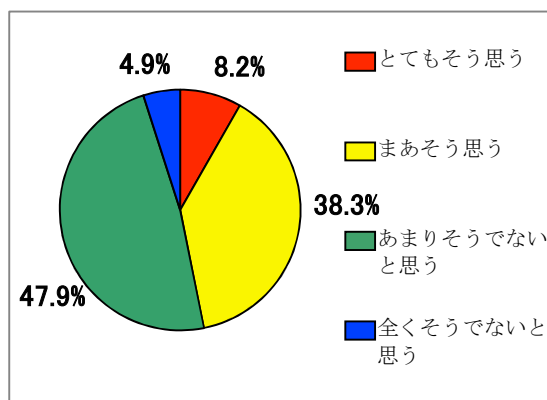
「外国語や異文化への関心が増えた」の割合は，「とても思う」が約１０％，「まあ思う」も合わせると，約９５％となる。指導者の多くが，児童の外国語や異文化への関心の高まりを実感している。このことは，ベネッセアンケートでも同様であるが，三好郡・市の方がその割合が高い。

Q 1 7. 《児童に関して》日常的に、英語（あいさつなど）を使おうとしている。

〔三好郡・市アンケート〕



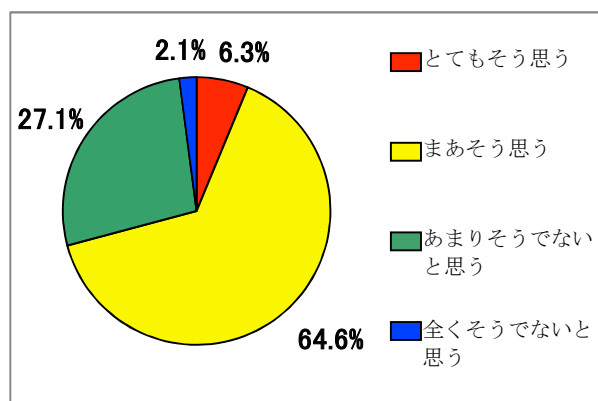
〔ベネッセアンケート〕



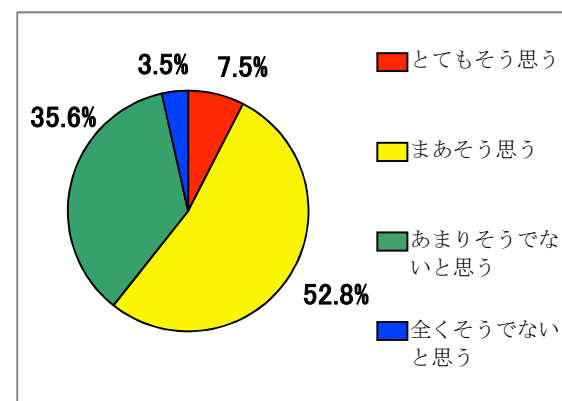
「日常的に英語（挨拶など）を使おうとしている」の割合は、「とても思う」が約2%と非常に低く、「まあ思う」を合わせても、約30%である。指導者の多くが、児童の英語への日常的な使用を実感していない。ベネッセアンケートでもほぼ同様であるが、三好郡・市の方がその傾向が強い。

Q 1 8. 《児童に関して》英語の発音が良くなったか。語彙が増えた。

〔三好郡・市アンケート〕



〔ベネッセアンケート〕

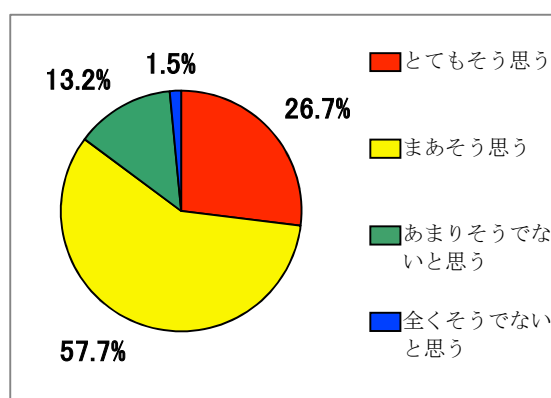
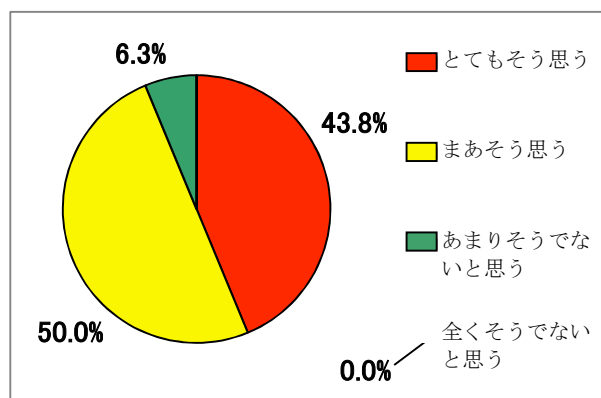


「英語の発音が良くなった。語彙が増えた」の割合は、「とても思う」が約6%と低いですが、「まあ思う」を合わせれば、約70%となる。児童の英語の発音や語彙については、おおむね達成できている。ベネッセアンケートも同様であるが、三好郡・市の方がその割合が高い。

Q 1 9. 《児童に関して》外国人（ALT など）に対して、ものおじしなくなった。

〔三好郡・市アンケート〕

〔ベネッセアンケート〕

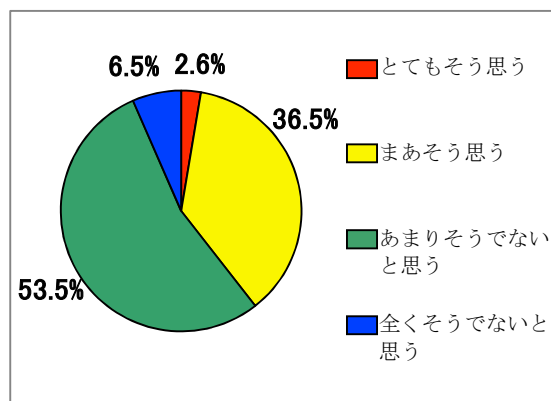
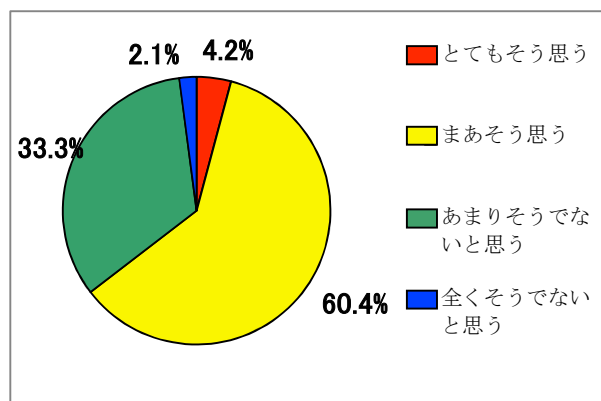


「外国人（ALT など）に対して、ものおじしなくなった」の割合は、「とても思う」が約40%。「まあそう思う」を合わせれば、約95%となる。児童の非常に多くがものおじしなくなったと言える。ベネッセアンケートも同様であるが、三好郡・市の方が「とてもそう思う」のその割合が高い。

Q 2 0. 《児童に関して》学級の児童たちの仲が良くなった。

〔三好郡・市アンケート〕

〔ベネッセアンケート〕

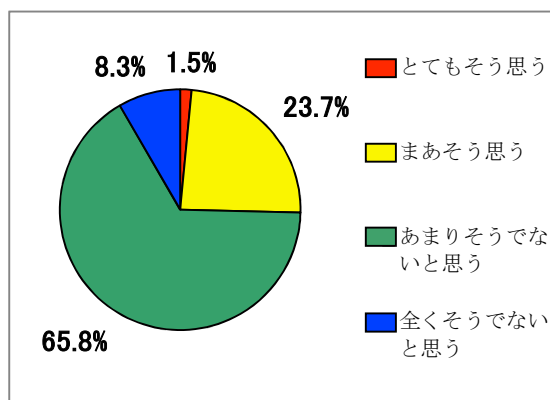
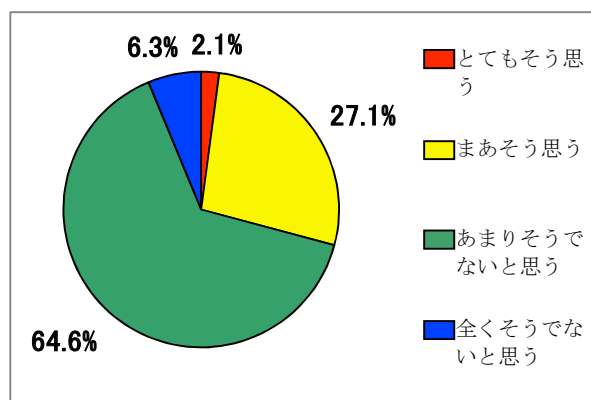


「学級の児童たちの仲がよくなった」の割合は、「とても思う」が約4%と非常に低いが、「まあそう思う」を合わせれば、約65%となる。一方、「あまりそうではないと思う」「全くそうではないと思う」の合計は約35%あり、児童の仲が良くなることにすぐに結びつくわけではないと言える。ベネッセアンケートも同様である。

Q 2 1. 《児童に関して》他教科で積極的に活動するようになった。

〔三好郡・市アンケート〕

〔ベネッセアンケート〕

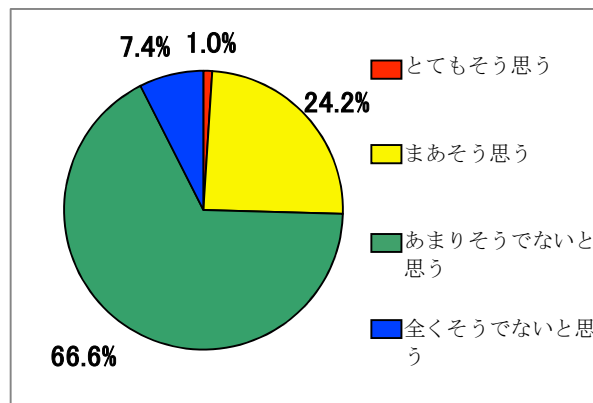
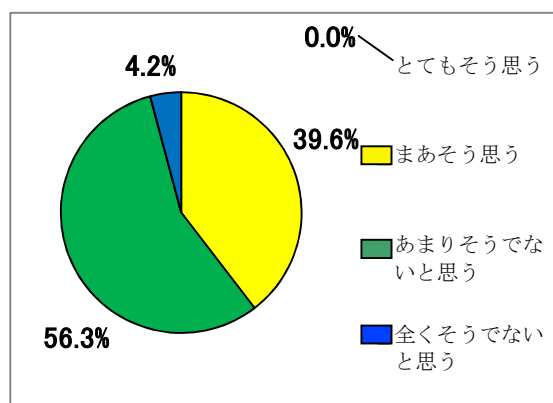


「他教科で積極的に活動するようになった」の割合は、「とても思う」が約2%と非常に低く、「まあそう思う」と合わせて30%足らずである。一方、「あまりそうではないと思う」「全くそうではないと思う」の合計は約70%あり、他教科での積極性にはすぐに結びつくわけではないと言える。ベネッセアンケートも同様である。

Q 2 2. 《児童に関して》ものの見方や考え方が多様になった。

〔三好郡・市アンケート〕

〔ベネッセアンケート〕

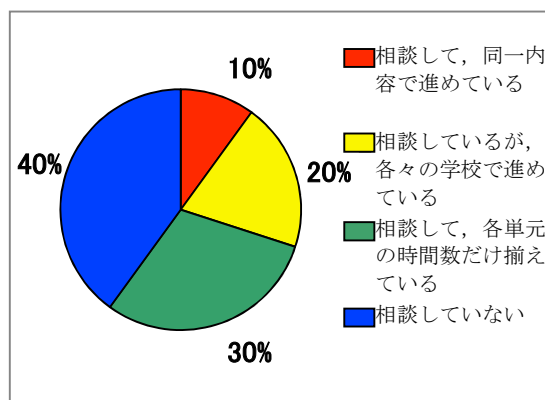
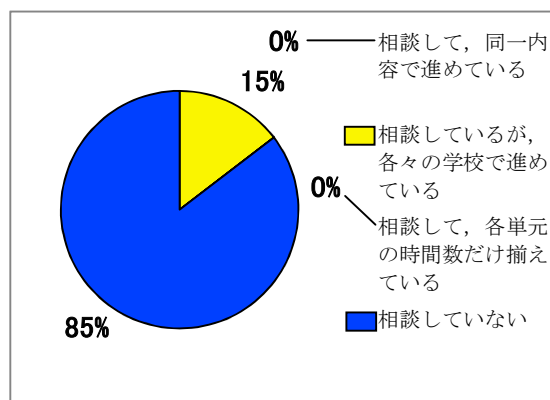


「ものの見方や考え方が多様になった」の割合は、「とても思う」がなく、「まあそう思う」と合わせて約40%である。一方、「あまりそうではないと思う」「全くそうではないと思う」の合計は約60%あり、ものの見方や考え方の多様性にはすぐに結びつくわけではないと言える。ベネッセアンケートはさらにその傾向が強い。

Q 2 3. 同一中学校区の小学校同士（全体または一部）で、外国語活動について相談したか。

〔三好郡・市アンケート〕

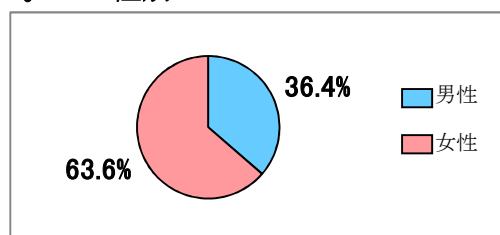
〔ベネッセアンケート〕



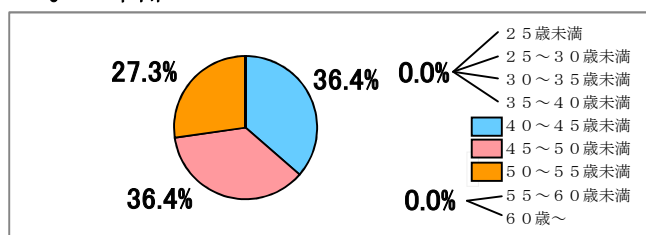
「同一中学校区の小学校同士（全体または一部）で外国語活動についてそうだったか」の割合は、「相談して、同一内容で進めている」「相談して、各単元の時間数だけ揃えている」がなく。「相談しているが、各々の学校で進めている」は約15%である。一方、ベネッセアンケートでは「相談していない」が約40%であり、三好郡・市では、相談している学校が少ない上に、外国語活動に進める上で他の学校との結びつきも弱いと言える。

（2）平成24年度に中学校で英語活動を行った指導者対象アンケート

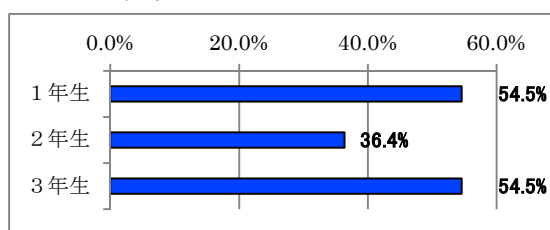
Q 1. 性別



Q 2. 年齢



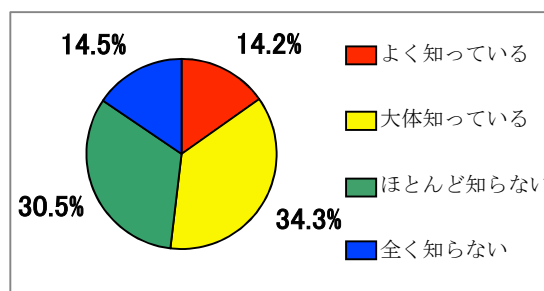
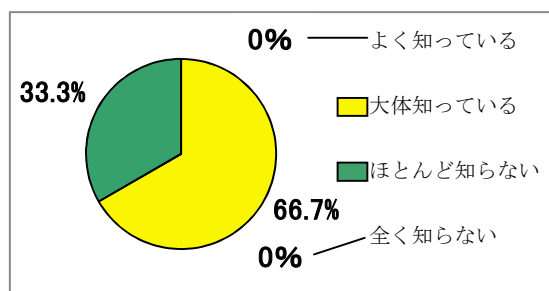
Q 3. 担当学年



Q 4. 小学校の「外国語活動」でどんなことが行われているかを知っているか。

〔三好郡・市アンケート〕

〔ベネッセアンケート〕



「よく知っている」はなく、「大体知っている」と合わせると約60%である。ベネッセアンケートにおいても、その割合はほぼ同じだが、ベネッセアンケートでは「よく知っている」が約14%ある。一方、「ほとんど知らない」が約30%あるが、「全く知らない」はない。ベネッセアンケートでは、「ほとんど知らない」の割合はほぼ同じだが、「全く知らない」は約14%である。三好郡市では、知っているかどうかについては、両極端の割合が低いと言える。

Q 5. Hi,Friends についてどう思うか。

●肯定的な意見

- ・構成がよく考えられていて、素晴らしいと思う。文字なしで音声のみで指導しているのかどうか興味がある。
- ・中学校で学習する文法が入っているので、生徒にとっては、中学校で親しみがわく。
- ・すべてを習熟させる必要がないのなら、(Hi,friends を使って) 児童が活動してみることが可能なだろう。

「文字なしで（どのようにして）音声のみで指導しているのかどうか興味がある。」とあるように、小学校に比べて文字指導の比率が高い中学校の指導者にとっては、Hi,friends の中で使われている文字の少なさに対して関心を示していることがうかがわれる。また、文法については、小学校ではそういった用語も出てこないし、授業で使われる文を分解して説明することもないが、小学校においてある程度まとまった文を聞いたり発したりすることが、中学校での文法学習に良い影響が出ることを指摘している。

●否定的な意見

- ・とても色鮮やかで、中学校英語と少しギャップを感じる。
- ・生徒用の教材が必要なのかと疑問に思う（書くことに力点がおかれないか心配）。
- ・内容量がやや多い。

中学校のテキストも以前と比べると色鮮やかになったが、それでも小学校のものと比べるとこのような感想となるのだろうか。小学校の外国語活動の重点が「聞くこと」なら、たとえ分量の少ないものであってもテキストは不要と考えるのも無理はない。書く活動は決して多いとは思わないが、中学校の指導者にとっては、小学校では「聞くこと」に徹してほしいという思いがあらわれている。

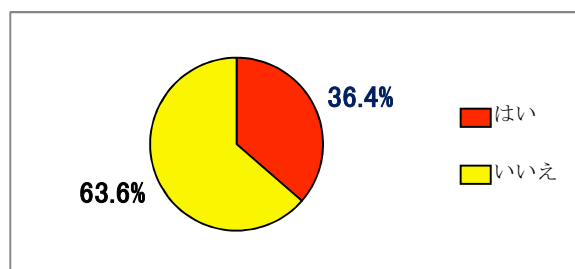
●その他の意見

- ・中学校 1 年生に Hi,friends にある活動をさせてみた。小学校で学習したことを中学校 1 年生の 1 学期に取り入れると良いと思う。

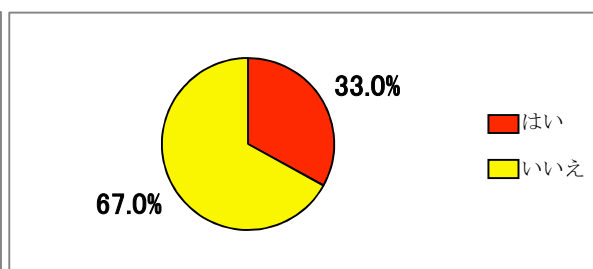
こういったことが中学校の初期の段階でより効果的に行われるということは、入学して間もない生徒に「何となく耳にしたことがある」と思わせることになり、小学校から中学校へのスムーズな移行に役立つ。

Q 6. 小学校での「外国語活動」について、小学校と何か話し合ったか。

〔三好郡・市アンケート〕



〔ベネッセアンケート〕

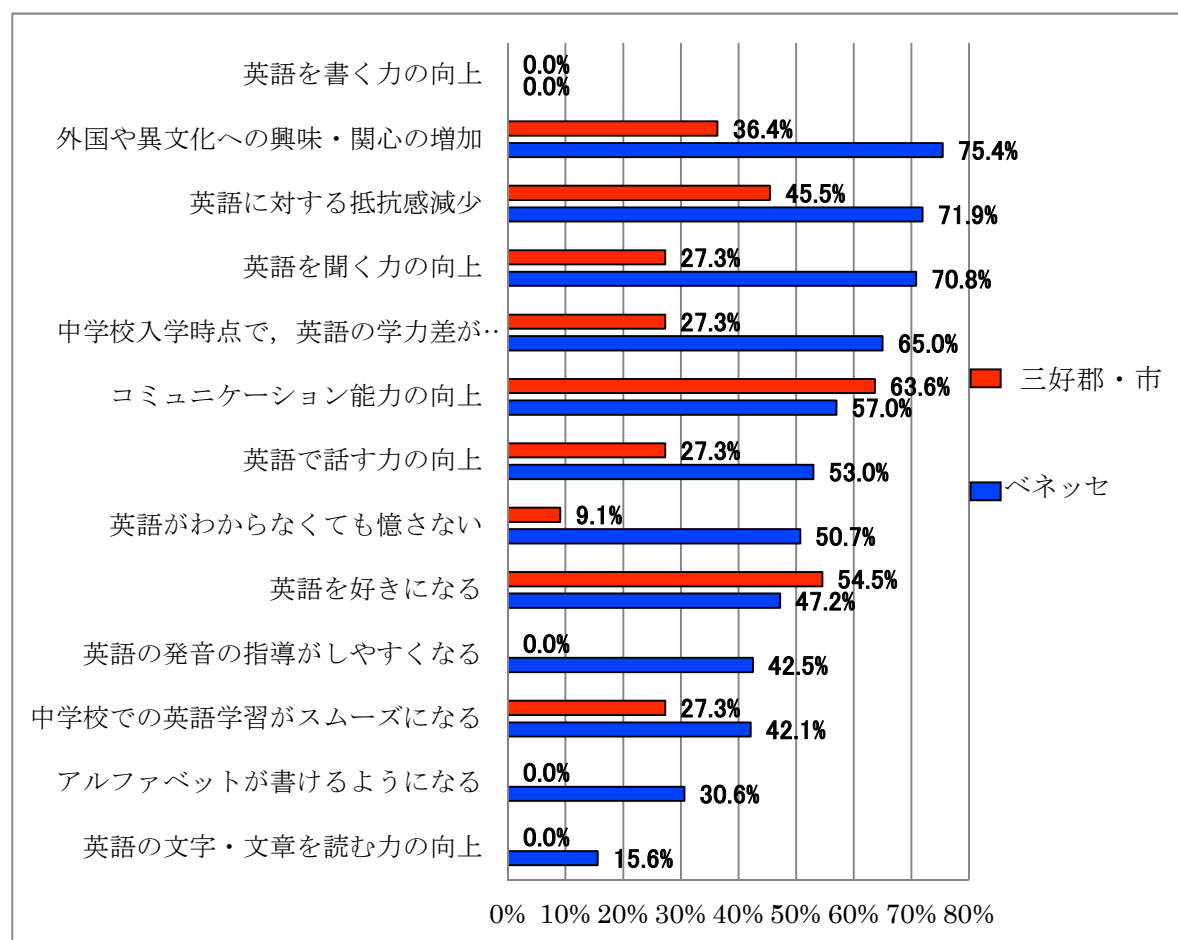


Q 7. (Q6で「ある」の人のみ) どんなことを話し合ったか。

- ・「小学校での外国語活動と中学校での学習は目的が違うが、同じ英語の活動なので、英語嫌いを作らないよう工夫する。」と小学校の先生方はおっしゃっていた。中学校のほうでは、「小学校でどんな文やどれくらいの単語を聞いたりしゃべったりできるかをだけ把握しておかなくては。」ということでした。
- ・授業公開
- ・中学校との接続について。書くことの指導について。
- ・年に 1 度 (3 月くらい) 集まって、小学校でどんなことを教えたかを中学校に伝達するように決めた。

小中連携における課題について、小・中学校ともその存在は認識している。小学校での外国語活動は中学校の前倒しではないということが両校種の指導者に十分認識されるようにするという点で、授業公開や報告会は有意義な取り組みと言える。このような取り組みによって、同じ中学校区の小学生の学習内容やレベルを統一することができれば、中学校での指導もやりやすくなるだろう。

Q 8. 小学校の「外国語活動」について、どう思うか。（5つ選択）



上記の選択肢の中の好影響のもの（「中学校入学時点での学力差」以外のもの全て）のうちの多くで、三好郡市の方が割合が低い。特に低いのが、「英語の発音の指導がしやすくなる」「英語がわからなくても憶さない」である。三好郡市の方が高い割合であるのは、「コミュニケーション能力の向上」「英語が好きになる」の2つで、その差は少ない。

Q 9. 小学校の外国語活動に求めることは？

●関心・意欲態度について

- ・英語を大きな声で憶することなく発音できたり、新しい表現を覚えようとする姿勢など、小学校英語活動の効果であると思う
- ・英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする積極性が身につくと思うので、その点で中学校への移行がスムーズになったと思う。
- ・入学当初から英語が苦手という生徒もいます（コミュニケーションのとりにくいタイプの生徒かもしれませんが・・・）。
- ・中学校入学時にすでに英語嫌いの生徒を作らないようにしてほしい。
- ・ALTとのコミュニケーションを通して英語の楽しさを子どもに伝えることだと思う。

- ・英語を聞いたり話したりすることに慣れさせ、積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を育てていただけるとうれしい。
- ・楽しくかつ役に立つ英語学習を！

英語教育の専門家ではない小学校の指導者は、英語を教えることよりも、児童といっしょに臆することなく積極的に相手とのコミュニケーションを図ろうとする学習者としてのモデルになることが求められている。

● 4 技能について

- ・音声や発音、会話中心の活動だとは思いますが、ローマ字がつづれるようにしておいてほしいと思う。ローマ字がつづれない生徒がライティングでつまづいている。
- ・小学校でもフォニックスを学ばせたらと思う。
- ・音声指導だけで十分。フォニックスを教えてもらえるとうれしい。
- ・たくさん聞かせてもらいたい。

小学校ではアルファベットの音と大文字、小文字が分かる程度までの指導が求められているのでこういった指摘がなされたと考えられるが、その指導に充てる時間数が少ないため、なかなか定着できていない現状が現れている。

英語のルール（文法）は、英語教育の専門家がいる中学校でしっかり指導するので、小学校では「コミュニケーションの素地」をしっかり養ってほしいという中学校側の思いが表れている。

また、アルファベットとつづり字の関係は小学校では扱わないが、それを指導する中学校にとっては、その関係のややこしさから、より早い段階から学んでほしいという思いが見て取れる。だが、小学校の指導者にとっては、文法指導と同じようにこのフォニックスの指導も困難と思われる。たくさん聞くことに関しては、Hi,Friends の活用によって十分可能である。

4 調査を終えて

英語を使って色々な国の人と話ができたらというのは一般の日本人の長年の願いである。日本でもその実現のために様々な取り組みがなされてきたが、周辺の国々の中には強力な施策によって日本以上の成果を上げている国もある。こういった状況の中で、今回の小学校外国語活動の導入は、日本の外国語教育において何らかの良い影響を及ぼすものと期待される。

しかし、導入の効果が表れるためには、「それは中学校の前倒しではない。」ということの意味を小学校・中学校の両者がはっきりと捉えた上で、それぞれの校種において指導する必要がある。

今回の調査に表れた、小学校での外国語活動の現状や中学校の指導者の思いを知ることにより、指導者各人がよりよい指導に取り組めることを願っている。

最後に、本アンケート実施に当たっては、比較的多忙でない時期を選んだつもりであるが、年間を通して何らかのやるべきことを抱えている指導者の皆さんにとっては煩わしいことであったにもかかわらず、調査にご協力していただき感謝致します。

《参考資料》

「第2回小学校英語に関する基本調査 2010（ベネッセ）」

三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について

三好教育研究所 研究員 岡本 博一

1 はじめに

近年の情報社会の急激な進展にともない、教育現場でもその情報通信技術(ICT)を最大限に活用した21世紀にふさわしい学校教育の創造が求められている。平成23年4月には文部科学省より「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」が公表され、情報活用能力の育成や情報通信技術の活用、校務の情報化等が示された。

こうした社会情勢の中で三好市・三好郡の学校現場では、全国に先駆けて教育の情報化が進められてきた。三好市・東みよし町の教育委員会は学校現場からの要望に応じて、環境の整備やさまざまなＩＣＴ機器も導入してきた。その活用が日々の教育活動の中で進められている。

しかし、小学校と中学校ではその活用に差が見られるなど、課題についても指摘されている。そこで、今回は三好市・三好郡の小・中学校教職員を対象に2012年11月に行ったアンケートをもとに、また、社団法人日本教育工学振興会（JAPET）と日本マイクロソフト株式会社が2011年11月に実施した共同調査『学校でのＩＣＴ活用についての実態調査と教育の情報化への提言』を参考に、三好地域の学校現場におけるＩＣＴ活用状況について現状と課題を考察することにした。

2 調査の方法

今回の調査を実施するきっかけになったのは、平成24年6月8日に行われた三好教育研究所研究推進協議会において、「小学校と中学校ではＩＣＴ機器を含めたＩＣＴ活用に差が見られることが三好地域の学校教育の一つの課題ではないか」という意見が出されたことによるものである（先述）。これを受けて小学校と中学校のＩＣＴ利用状態を調査、分析して今後の活用推進を図ろうとするものである。

調査対象は三好市・三好郡の教職員で、小学校（約250名）・中学校（約130名）・計（約380名）に協力をしてもらい「ＩＣＴ活用状況について」というアンケート調査を実施した。アンケートの回収率は、小学校93.6％、中学校80.1％であった。

アンケート内容は、性別・年齢、校種を小学校、中学校とし、幼稚園は項目を設けていたが今回は実施しなかった。職種も管理職、教諭、養護教諭、助教諭（支援員含）と授業を担当していない事務職員にも参加してもらった。

また、中学校では専門教科によってＩＣＴ活用に差が見られるのではないかと考え、小学校、中学校関係なく、専門教科についても回答してもらった。

アンケートはチェックマーク「√」を入れる形式で、ＩＣＴ活用について「賛成・やや賛成・やや反対・反対・わからない」の他、ＩＣＴ機器などについて「よく使う・ある程度使う・あまり使わない・全く使わない」の4段階で回答してもらった。

【ICT活用状況に関するアンケート】

三好教育研究所

ICT 活用に関するアンケートにご協力をお願いします。当てはまる□に✓をしてください。

1 性別・年齢 ☐男 ☐女 ☐20歳代 ☐30歳代 ☐40歳代 ☐50歳代 ☐60歳代

2 校 種 ☐幼稚園 ☐小学校 ☐中学校 ☐その他（ ）

3 職 種 ☐管理職（校長・副校長・教頭） ☐教諭（主幹教諭・指導教諭等） ☐養護教諭
☐事務職員 ☐栄養教諭（職員） ☐助教諭（臨時・支援員等） ☐その他（ ）

4 専門教科 ☐国語 ☐算数・数学 ☐社会 ☐理科 ☐英語 ☐音楽 ☐図工・美術
☐保健体育 ☐技術・家庭 ☐その他（ ）

5 授業で ICT を積極的に活用することについて

☐賛成である ☐やや賛成である ☐やや反対である ☐反対である ☐わからない

6 授業でよく使う ICT は何ですか。

パソコン（タブレット含）	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
プロジェクター	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
実物投影機	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
テレビ・ビデオ・DVD など	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
電子黒板	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
デジタルカメラ	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
ビデオ（ムービー）カメラ	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
インターネット	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
その他・使用頻度等				

7 担当している授業等において、園児・児童・生徒に ICT をどの程度、使わせていますか。

パソコン（タブレット含）	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
デジタルカメラ	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
ビデオ（ムービー）カメラ	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
インターネット	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
パワーポイントなどプレゼンテーションソフト	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
その他・ソフトウェア等				

8 あなたの学校ではどのような場面で、どのくらい ICT が活用されていると感じますか。

国語や算数・数学などの5教科	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
音楽・技家・美術・体育など技能教科	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
道徳・学活	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
総合的な学習の時間	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
学級・学校行事や課外活動	☐ よく使う	☐ ある程度使う	☐ あまり使わない	☐ 全く使わない
その他・どのような場面ですうか				

9 どのような環境であれば ICT の活用が進むと思いますか。（複数可）

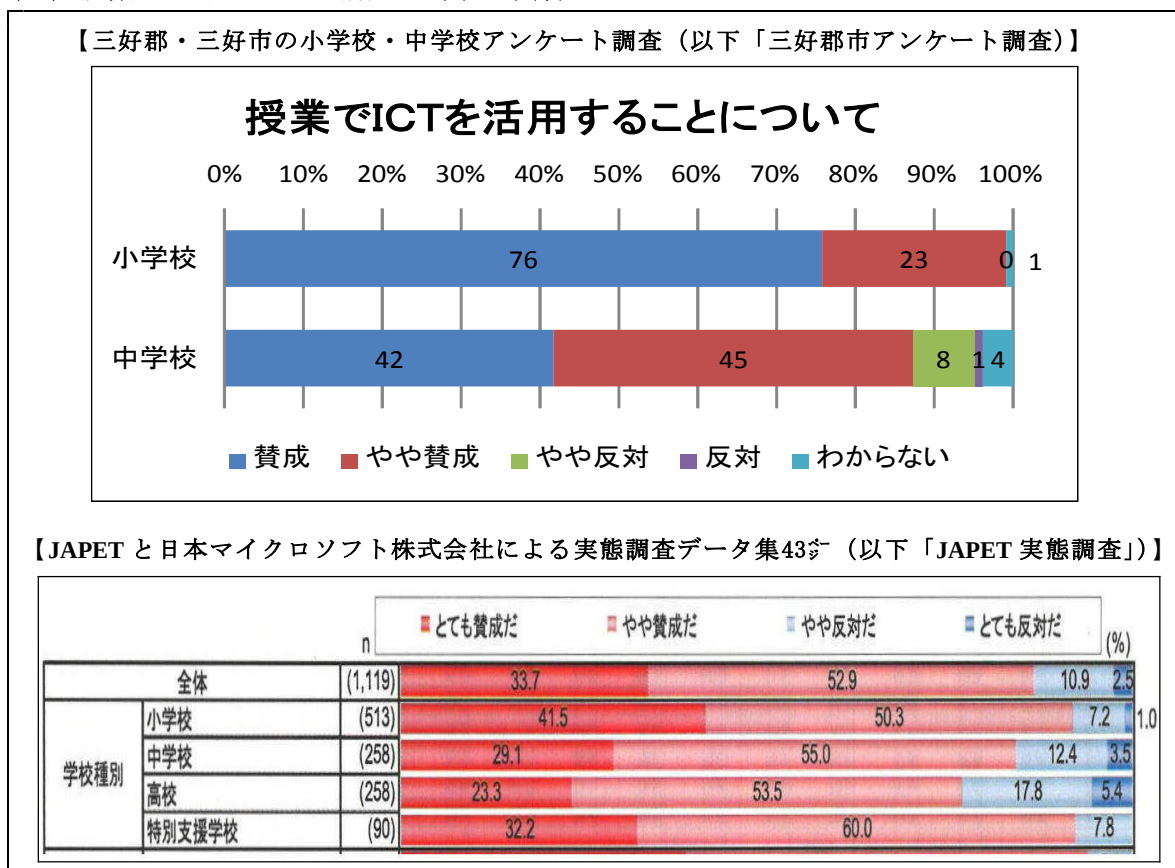
☐ 普通教室へのパソコン配備	☐ 高速無線 LAN 等校内のどこでもインターネットがつながる設備
☐ ノートパソコンやタブレット端末の配備	☐ デジタル教科書やソフトウェアの配備
☐ ICT 支援員など指導する教員の配置	☐ その他（ ）

10 ICT 活用に関する意見・要望などをお書きください。

ご協力ありがとうございました。

3 アンケート調査からの考察

(1) 授業におけるICT活用に対する賛否



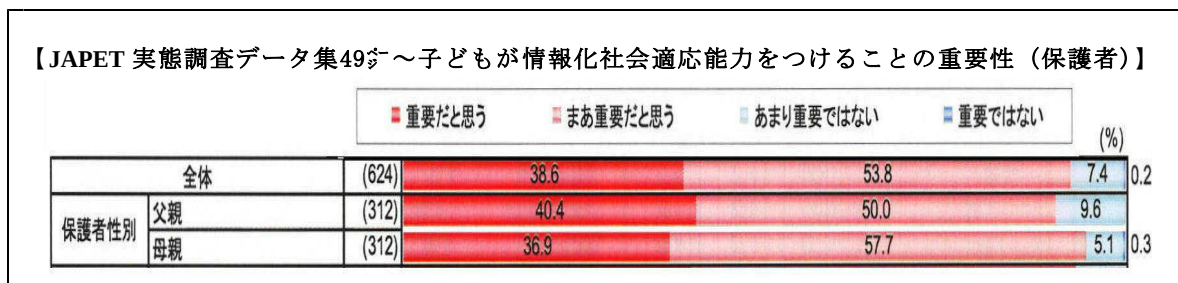
「ICT活用に対する賛否」では、三好市・三好郡の小学校、中学校どちらも「賛成」が多いという結果が見られた。小学校では、「賛成」・「やや賛成」の合計が99%，中学校では87%と、いずれも JAPET と日本マイクロソフト株式会社の全国の教職員を対象とした調査（小学校約92%，中学校約84%）を上まわる結果が見られた。特に三好市・三好郡の小学校では賛成が99%，「反対」・「やや反対」は0%で、「わからない」と答えた人が1%にすぎなかった。

それに対して、中学校では賛成が87%いるのに対して、「反対」・「やや反対」という反対が9%，また「わからない」と答えた人も4%おり、両方合わせると13%となる。全国調査の「やや反対だ」12.4%「とても反対だ」3.5%を合わせた15.9%よりは少ないものの反対意見があるという点には注目すべきではないだろうか。そして、三好市・三好郡の小学校の反対0%と比較してみると非常に高い数字と言えるかもしれない。

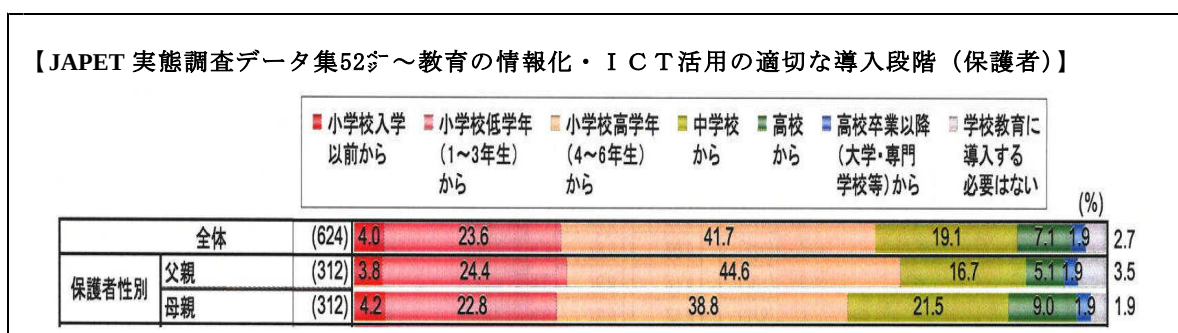
(2) ICT活用への保護者（の意識）からの要望

小中学生の子どもをもつ保護者はICT活用についてどのような意識を持っているのだろうか。JAPET と日本マイクロソフト株式会社の共同調査（以下「JAPET 実態調査」）によると、保護者が子どもに身につけてほしい能力やスキルのうち、「パソコンやインターネットなどのITスキル」と答えている保護者は小学校45.6%，中学校58%，高校生57.4%，全体では51%の保護者がITスキルを身につけてほしいと考えており、その意識はすでに小学校高学年の子どもがいる保護者で50%を越えている（JAPET 実態調査データ集48頁）。

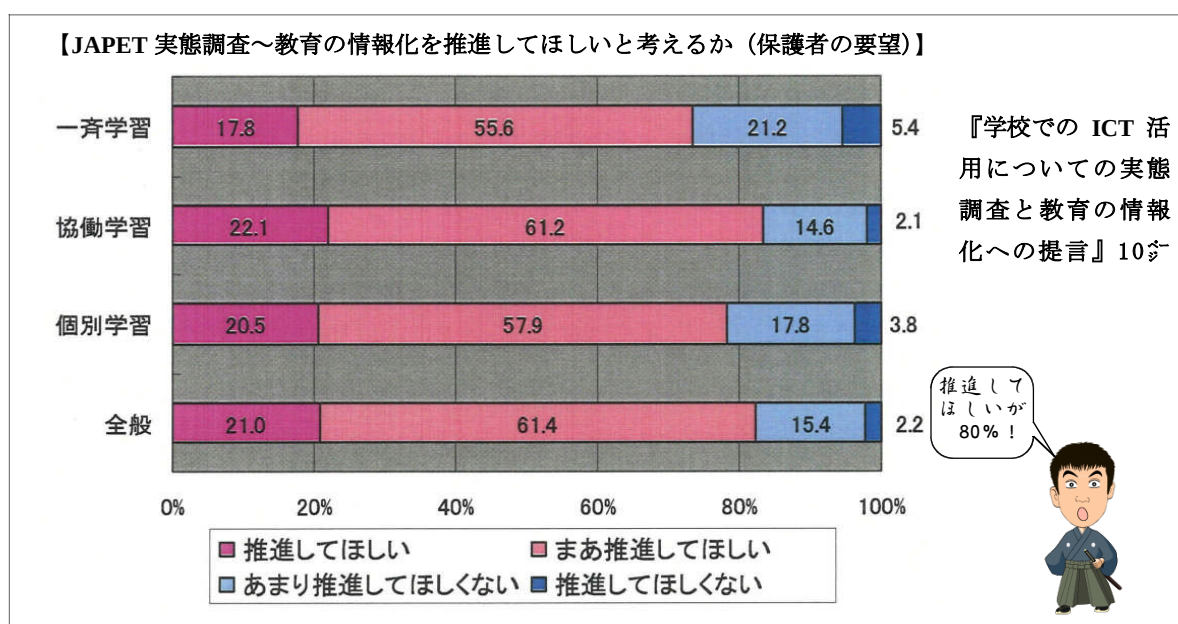
また、次のグラフを見ても分かるように、「情報化社会に適応する能力を身につけることの重要性」については、「重要」（38.6%）「まあ重要」（53.8%）と答えた保護者が全体で92%にのぼり、中学生や高校生の保護者からは「運動能力」以上に「ITスキル」を身につけることが期待されているという結果が出ている。



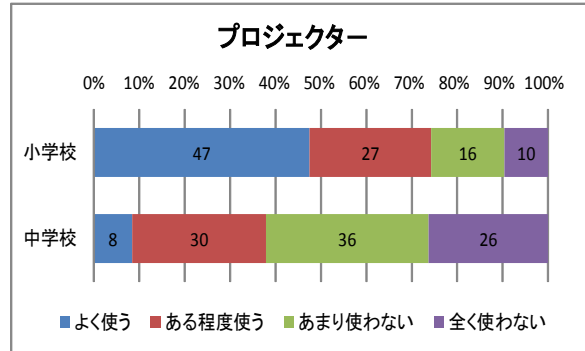
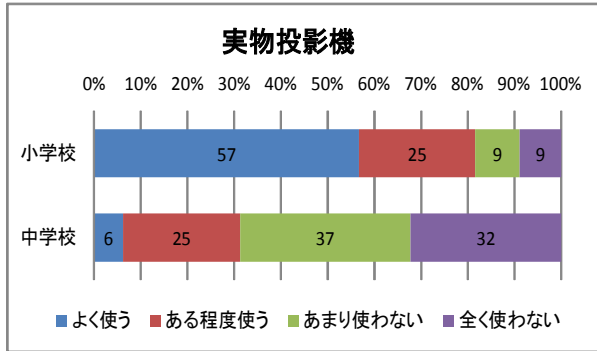
その他、保護者の要望として「教育の情報化・ICT活用はどの学校段階からの導入・推進が適切か」という問いに対しては、「小学校高学年」が最も多く41.7%，次いで「小学校低学年」23.6%，「中学校から」が19.1%となっており，65.3%の保護者が小学校段階での導入を望んでいることがうかがえる。



そして次のグラフ、授業でのICT活用について授業形態別の実態調査結果を見ても、一斉学習、協働学習、個別学習という3つの学習形態すべてにおいて、「推進してほしい」・「まあ推進してほしい」という要望が80%前後という高い調査結果が出ている。

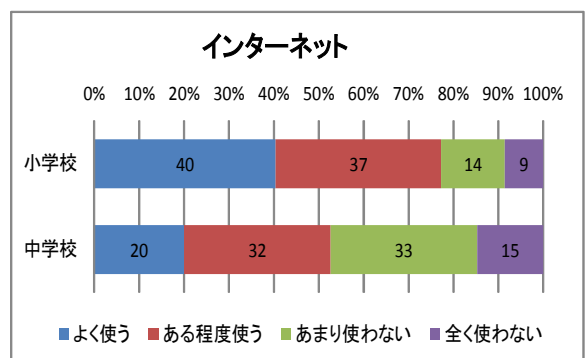
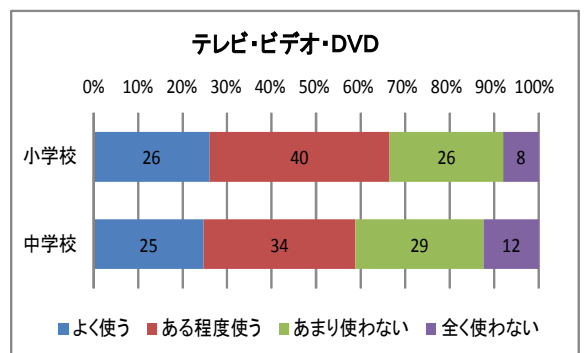
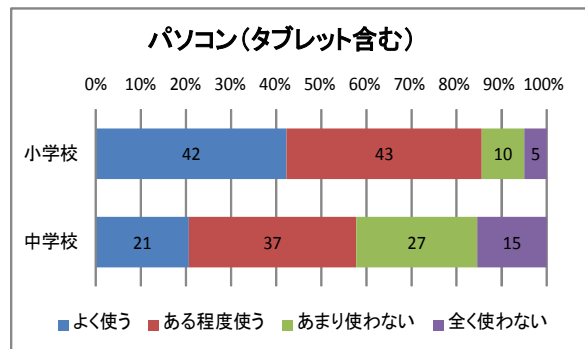


(3) 授業でよく使う I C Tについて



三好郡市アンケート調査の6「授業でよく使う I C Tは何ですか?」の質問では、小学校と中学校では、その活用率に大きな差があるものと中学校でも50%以上の活用率がある I C Tがあることがわかった。

活用率の高いものは「パソコン」や「テレビ・ビデオ・DVD」、「インターネット」である。小学校では「パソコン」を「よく使う」が42%、「ある程度使う」が43%で合わせて85%となり小学校では非常によく使われていることがうかがえる。中学校では「よく使う」が21%、「ある程度使う」が37%で合わせて58%となり、小学校に比べると低いかもしれないが、半数以上の教職員がわりと使っていることになる。これは他の「テレビ・ビデオ・DVD」や「インターネット」でも似たような結果になっており、いずれも小学校では60%から70%以上が、中学校では50%から60%程度の教職員がわりと使っていると考えられる。「パソコン」と「テレビ・ビデオ・DVD」の活用率がよく似ているのは、大型テレビの導入などにより、パソコンと大型テレビを接続して使うなどしている教員が多いのではないだろうか。



それに対して、その活用率に大きな差があったものが、「実物投影機」と「プロジェクター」である。「実物投影機」は小学校「よく使う」57%、「ある程度使う」25%、合わせて82%だったのに対して、中学校は「よく使う」6%、「ある程度使う」25%の合わせて31%で、その差が3倍近くあった。また、「プロジェクター」についても小学校は「よく使う」「ある程度使う」を合わせて74%なのに対して、中学校は「よく使う」「ある程度使う」が38%となっており、その活用に約2倍の差があるという結果となった。

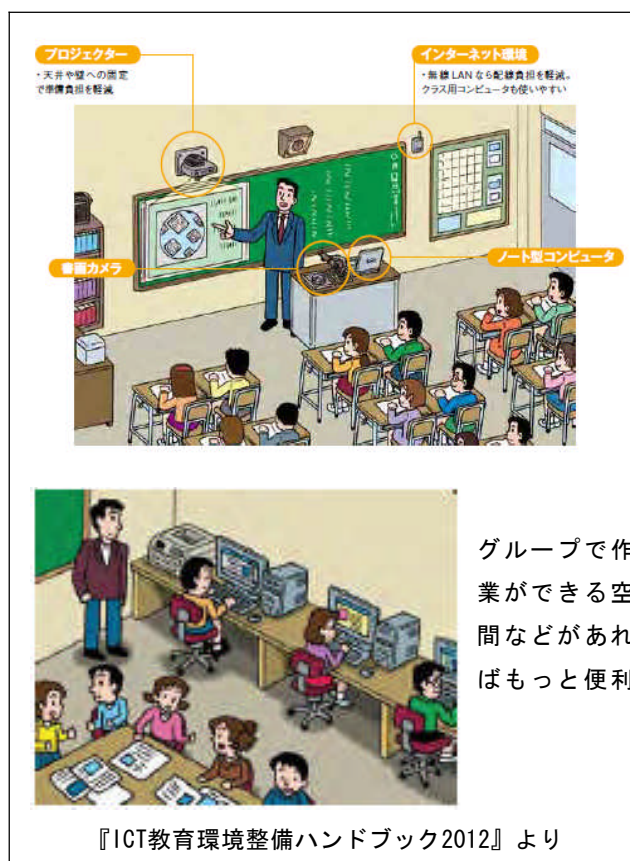
パソコンを大型テレビに接続するなどすれば、プロジェクターは必要なくなると考えられるのでプロジェクターの活用が低くなくなってもおかしくはないが、小学校との活用の差を見てみると、それだけが要因ではないと読み取れる。小学校は学級担任がほとんどの授業を受け持ち、一つの教室で授業をしているので、たとえばＩＣＴ機器などを常時セットした状態で、電源を入れれば使用できる状況にある。しかし、中学校では教科によって指導する教員も入れ替わるので常に機器をセットしておくわけにはいかない。また、教員も複数のクラスの授業を担当しており、毎回同じ教室で授業をするわけではないので教室を移動するたびに機器をセットしなければいけないことになる。このような手間が小学校との活用率の違いとなって表れているのではないだろうか。

「テレビ・ビデオ・ＤＶＤ」の活用率で「よく使う」「ある程度使う」（小学校66％，中学校58％）を見てみるとそれには電源を入れるだけですぐに使えるというメリットがあるだけでなくビデオテープやＤＶＤなど、教材ソフトも充実しているということが言える。「インターネット」に関してもコンピューター室にいれば、机の上にパソコンがあり電源を入れればすぐにつながり活用しやすい環境にある。教室を移動しても電源を入れれば使える。あるいは電源を入れてソフトをセットしただけで使えるという、いわゆる手間のかからない機器や環境が多忙な学校現場では重宝されている。そのような環境にすれば、「実物投影機」などの活用も中学校でももっと進むのではないだろうか。

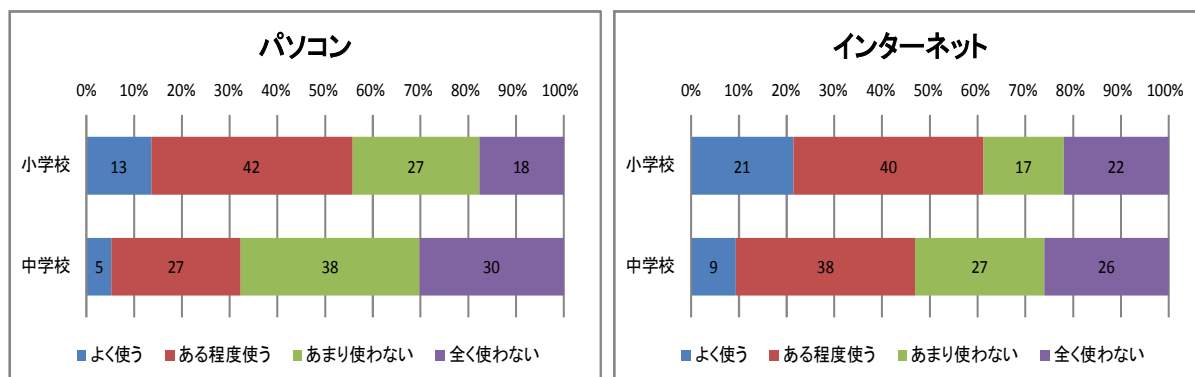
以前はどこの学校にも「視聴覚教室」というものがあつたが、それがいつの間にか「コンピューター室」などの違う教室になっていった。中学校でも生徒数の減少により空き教室などもこれから増えてくると考えられるので、ＩＣＴ活用推進のために、例えば「社会科教室」や「ＩＣＴルーム」というような教室をつくり、電源のスイッチを入れればすぐに使える環境を整えていくことが必要だと考える。

JAPET による『先生と教育行政のためのＩＣＴ教育環境整備ハンドブック2012』の第2章「どんなＩＣＴ環境を整備すればいい？」でも、普通教室のＩＣＴ環境として日常的に使いやすい環境ということで、「日常の授業のツールとして気軽に使えることを意識した環境整備が大切です。」と述べているが、三好市・東みよし町の教育委員会や三好教育会はそれに率先して取り組んできたと言える。三好郡市外から来た教職員の中には、この三好地域からＩＣＴ活用環境のヒントを学んで帰る人が多い。

さらに、これからは、無線ＬＡＮの普及やノートパソコン、タブレット端末の普及により理想的なＩＣＴ活用環境が整って行くことが予想され、私たちもどんどんアイデアを出していくべきだろう。



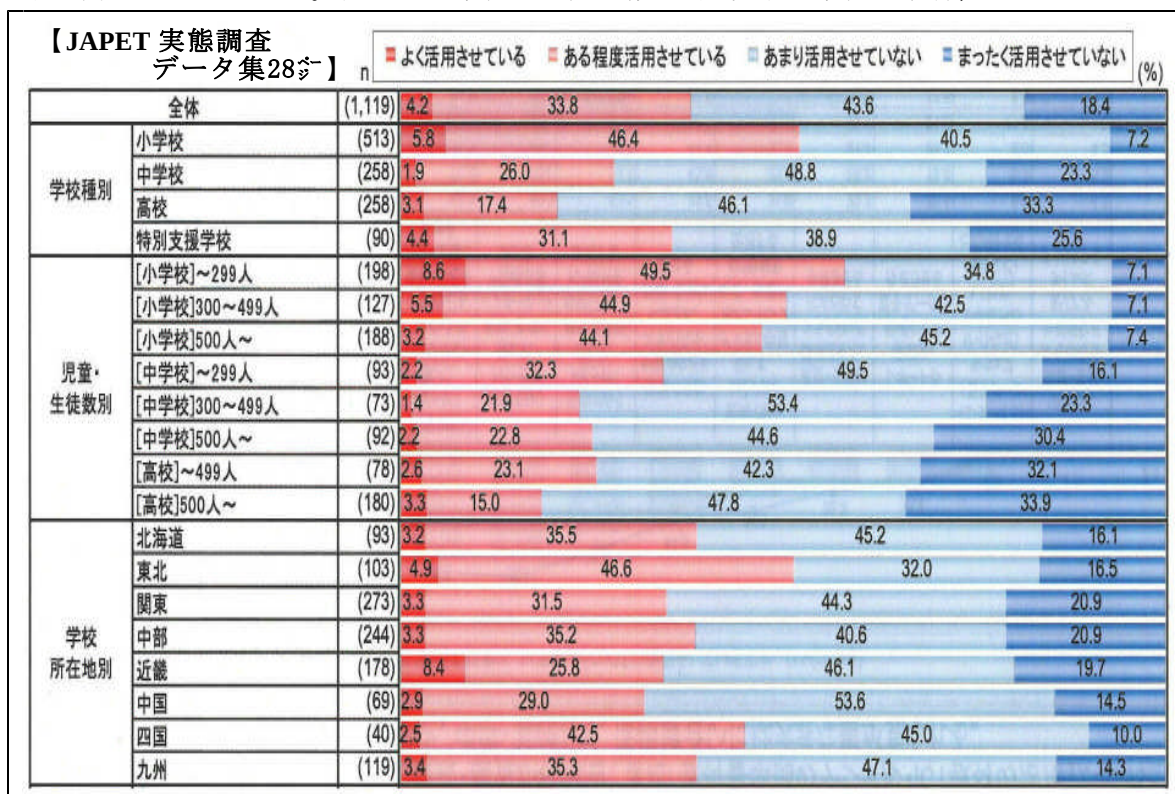
(4) 授業等において、児童・生徒にＩＣＴをどの程度使わせているか



三好郡市アンケート調査の7「担当している授業等で児童・生徒にＩＣＴをどの程度使わせていますか？」の質問では、「パソコン」や「インターネット」では「使う」が小学校が50%を超えており、逆に中学校は50%を下回っている。

「パソコン」は小学校が「よく使う」13%、「ある程度使う」42%で合わせて55%、中学校「よく使う」5%、「ある程度使う」27%で32%となっている。「インターネット」は小学校が「よく使う」21%、「ある程度使う」40%で合わせて61%、中学校は「よく使う」9%、「ある程度使う」38%で合わせて47%と「パソコン」ほど低くはないが、半数にとどいていない状況であることがわかった。

次の「JAPET 実態調査」を見てみると小学校では「活用させている」が52.2%と半数を超えているが、中学校では27.9%、高校では20.5%とその割合が低くなっている。小学校でも「よく活用させている」は約6%となっており、三好郡市の小学校の「よく使う」13%の約半分ということになる。また、児童・生徒数別（学校規模）のところを見ると、小規模校のほうが活用率が高いことがわかる。例えば小学校なら児童数299人以下の学校の場合、「よく活用・・・」

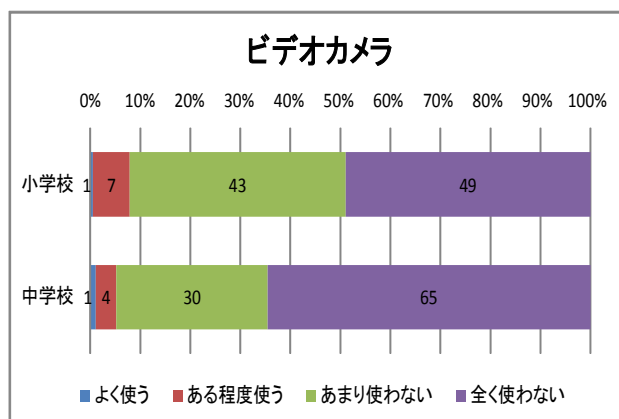
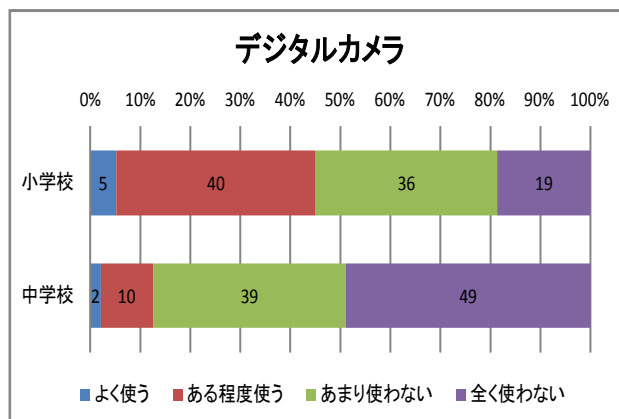
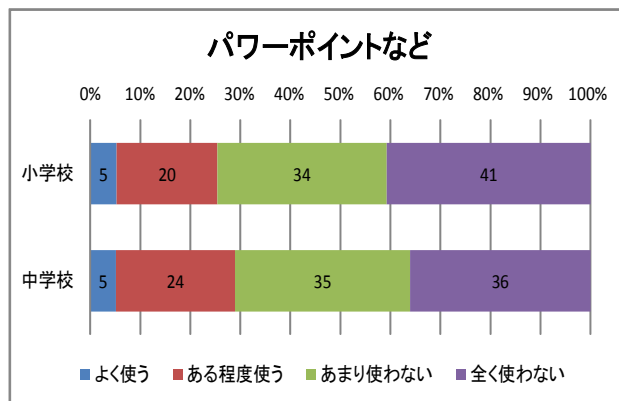


と「ある程度活用・・・」を合わせた「活用させている」が58.1%，児童数300～499人の学校は50.4%，児童数500人以上の学校は47.3%と児童数の増加にともなって活用が低くなっている。これは教室環境やI C T機器の数の問題等が理由だと思われる。

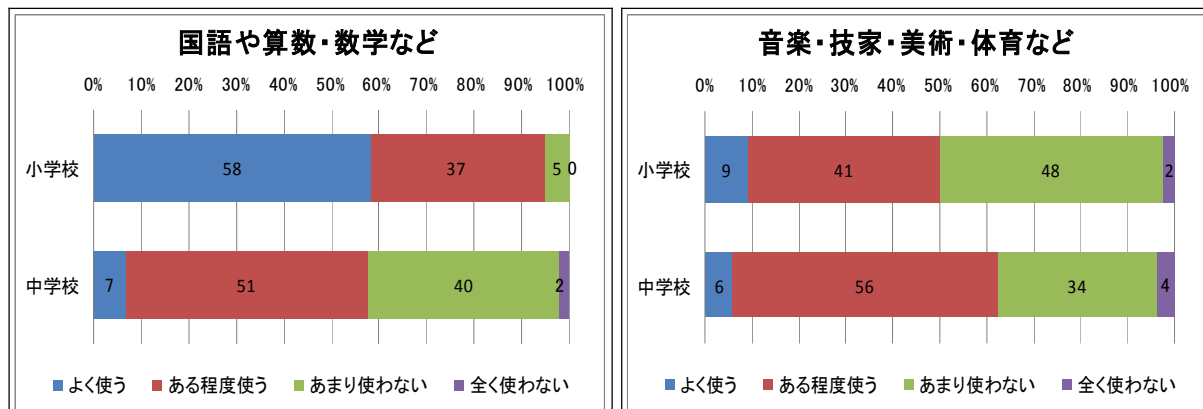
三好郡市アンケート調査で小学校より中学校の活用率がわずかではあるが高かったものが，パワーポイント等の「プレゼンテーションソフト」であった。小学校の「よく使う」「ある程度使う」が25%に対して，中学校のそれは29%であった。わずか4%程度の差ではあるが中学校が高い結果となった。

パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトは，小学校でも使っているので，中学生になった時点で，ほとんどの生徒が使いこなせるようになっている。私も学校現場で中学生にパワーポイントの使い方の説明をしたことがあるが，小学校でよく使っていた生徒は，説明など聞かなくてもある程度使いこなしているし，また，使ったことがない生徒でも中学生くらいになると少し説明ただけで，自分であっちこちをマウスでクリックし，使い方を発見していつている。習うより慣れろで，最近の生徒はそういう面では機器に触れることに慣れていると言える。

画像を記録するときに使用するカメラについては「デジタルカメラ」と「ビデオ（ムービー）カメラ」では大きな違いが見られた。まず「デジタルカメラ」は小学校と中学校で大きな差が見られた。「よく使う」「ある程度使う」が小学校45%に対して中学校12%という結果であった。おそらく小学校ではさまざまな場面で児童に活用させる機会が多いのではないかと考えられる。「ビデオカメラ」については小学校8%，中学校5%といずれも活用が低く，これは機器の数の問題もあるのではないだろうか。



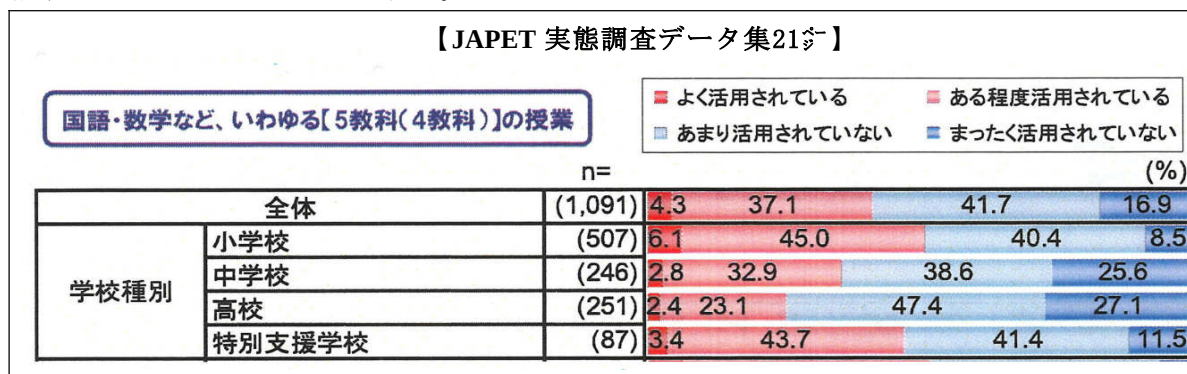
(5) どのような場面で、どのくらいICTが活用されているか



三好郡市アンケート調査8「あなたの学校では、どのような場面で、どのくらいICTが活用されていると感じますか？」の問いでは、「国語や算数・数学など」といった5(4)教科と「音楽・技家・美術・体育」といった技能教科で、小学校と中学校の違いが見られた。

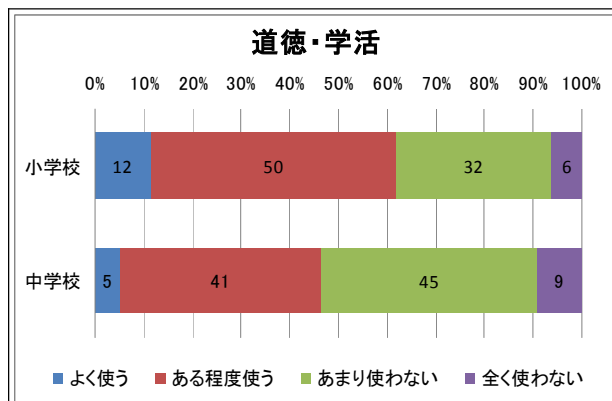
「国語や算数・・・」では、小学校が「よく使う」58%、「ある程度使う」37%で計95%が「使う」だったのに対して、中学校では「よく使う」7%、「ある程度使う」51%で「使う」の計は58%だった。小学校では普段から授業で使われているという意識が高いことがうかがえる。

「音楽・技家・・・」など技能教科においては、「使う」が小学校50%、中学校が62%と中学校の方が活用しているという意識が高いことがわかった。これは、技術・家庭科の授業などで情報について学ぶ単元があることなど、使用している機会が多いというイメージからそういう結果になったのではないだろうか。



「JAPET 実態調査」の「国語・数学など・・・」の結果を見てみると、「よく活用・・・」と「ある程度活用・・・」が小学校51.1%、中学校35.7%となっており、三好郡市の小中学校では全国の小中学校にくらべても活用が進んでいることがわかる。また、ここにはグラフを載せないが、同じく「JAPET 実態調査」の中学校「技術・家庭」の授業の結果を見てみると、「よく活用・・・」29%、「ある程度活用・・・」54%、合わせて83%と「技術・家庭」に限ると非常に高い活用意識が見られる。

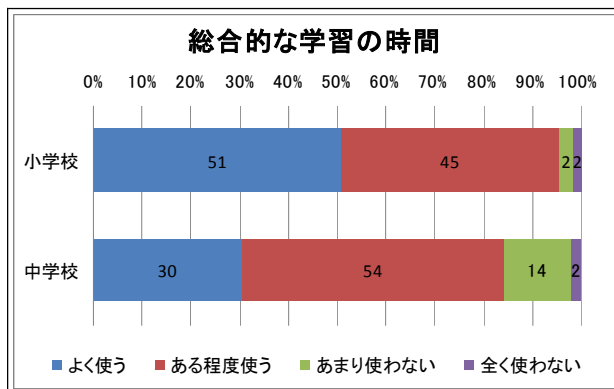
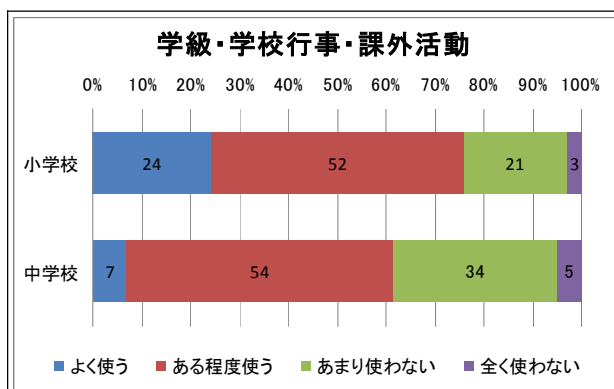
三好郡市アンケート調査のその他の結果を見てみると、「道徳・学活」では「使う」は小学校62%、中学校46%とやはり小学校の活用率が高い割合を示した。



小学校、中学校ともに50%を超える利用率が見られたのが右のグラフの「学級・学校行事・課外活動」と「総合的な学習の時間」である。

「学級・学校行事・課外活動」では、小学校が「よく使う」24%、「ある程度使う」52%で合計76%、中学校は「よく使う」7%、「ある程度使う」54%で合計61%であった。学習発表会や学校祭、卒業式などでICT機器を使っているのをよく見るが、学校行事などではICTはなくてはならないものになっている。

また、「総合的な学習の時間」においては、小学校が96%、中学校でも84%の教員が使っているという印象をもっている。「総合的な学習の時間」では、児童生徒がテーマを決めて調べ学習、まとめ、発表という方法を取り入れているので、その中で小学校・中学校ともに活用する機会が多い。しかし、調べ学習にしてもICTだけに頼るのではなく、書籍で調べたり、発表の形式もプレゼンテーションソフトを使ったものだけでなく、ポスターセッションなど、多様な取り組みが児童生徒の感性や生きる力を育てるということと言うまでもない。

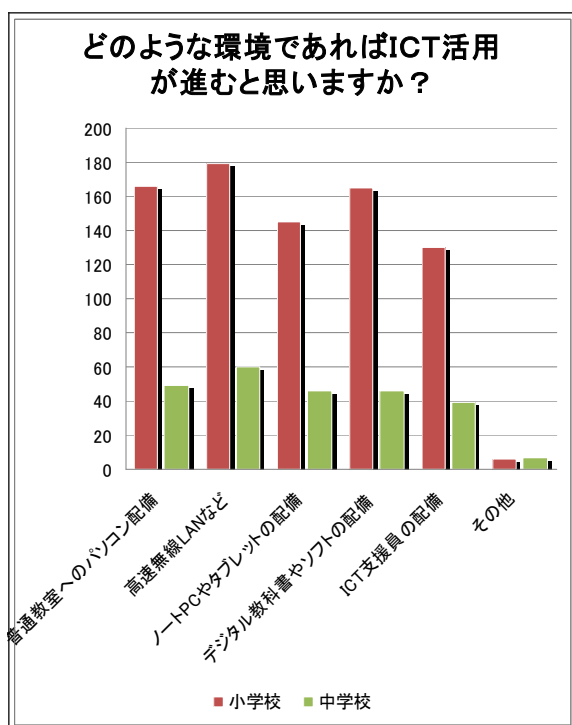


(6) どのような環境であればICTの活用が進むのか

三好郡市アンケート調査9の「どのような環境であればICTの活用が進むと思いますか？」(複数回答可)の問いでは、小学校・中学校ともに似たような割合での回答が寄せられた。

いちばん多かったのは「高速無線 LAN などの整備」、次いで「普通教室へのパソコンの配備」、3番目に「デジタル教科書やソフトの配備」、4番目が「ノートパソコンやタブレット端末の配備」、5番目に「ICT支援員の配備」であった。

このアンケート結果から読み取れることは、とにかくLANが教室に行き届いていることとパソコンをいちいち教師が持ち運びするのではなく教室に常設されている環境が理想的であるということである。大型テレビや実物投影機がほぼ常設されたことが、それらを活用する機会



が増えたことにつながっており、三好郡市外から来ている教員もそこにICT活用推進のヒントを得ているので、ぜひ、そのような環境が整うことを望みたい。

また、いつでも、どの教室でも手軽に自由に使える環境整備以外にもICT活用推進に効果的だと考えられるのが「ICT支援員」の存在である。三好郡市アンケート調査10の意見・要望でも「ICT支援員の存在意義は大きい」「ICT支援員が来てくれると助かる」「もっと授業にかかわってほしい」「必要不可欠、1校1名の配置を希望する」「常駐してほしい」など、ICT支援員への期待は非常に大きいものがある。

JAPETが平成18年度に文部科学省の委託を受けて行った「地域・学校の特色を活かしたICT環境活用先進事例に関する調査研究」でも、「学校のICTを阻むものは何か」という問いに対して、約70%の学校が「ICT活用をサポートしてくれる人がいない」と答えている。要するに、授業でICTを活用する教員の誰もが一度は経験したことがあると思うが、「映像が出ない」「音が出ない」などのトラブルへの不安がICT支援員がいることにより軽減・解消されるわけである。困ったときに「ちょっと教えて」「ちょっと教室まで来て」と言える支援員がいるとICT活用に躊躇している人でも、活用してみようかという気になると思うのでICT支援員の制度は今後も続けてもらいたいし、私たち教職員も支援員とコミュニケーションを取りながら、効果的な支援のあり方などを模索していく必要がある。

また、教職員の資質・ICT活用能力向上のための研究会や研修も必要である。意見・要望の中にも「最新の機器やソフトについて知る機会が定期的にあれば・・・」「授業で使えるアプリ・ソフトの情報がほしい」「初心者研修の実施」「講習も実施してほしい」などの要望があった。

三好郡市の小学校情報視聴覚部会では例年夏季休業日中に研修会を実施しており、ICT関連の多くの企業を招いて最新機器やソフトなどのプレゼンテーション、また、現場の教員の実践発表なども行っている。本年度、私も初めて参加させてもらったが、中身の濃い研修会で日々の実践にも役立つ情報や最新の機器も見ることができて参考になった。今後も実施されるなら、ぜひ中学校の教員にも多く参加してほしい。

（7）ICT活用に関する意見や要望

三好郡市アンケート調査10の「意見・要望」の中では、他にも参考とすべきものがたくさんあった。ページ数の関係で一部ではあるがここで紹介する。

【施設・設備などICT活用の環境について】

- ・メンテナンスをすぐに受けられる環境に
- ・どの教室でもICTが自由に使える環境に
- ・各教室に電子黒板・プロジェクター・パソコン・書画カメラ・デジタル教科書が常設されていること
- ・音楽室や家庭科室こそICT環境をよくしてほしい
- ・IWBやPCタブレットを1年生から配備
- ・ICT活用は教材の作成を通して進む。しかし自作するのは時間と手間がかかる。安価なデジタル教材、ソフトがあれば。
- ・デジタル教材は単価が高いので予算面でも配慮していただければと思う
- ・フィルタリングが厳しすぎると資料として閲覧したいHPも見ることができない
- ・現状と未来を見すえた計画的・継続的にICT化を進める現場と委員会の体制づくり。子ども達の未来への投資という行政の意識

【ICT活用での不安・疑問】

- ・タブレット等の使いすぎは眼によくないのでは
- ・生徒が受動的になってしまわないか。鉛筆を使って何度も書いたり、本を読んだりすることで脳が活性化するのではないか
- ・デジタル教科書は目の負担が心配
- ・健康面や精神衛生上不安がある
- ・ICTを授業に効果的に取り入れることには賛成だが、それによって児童の書くことや思考力を働かせることなどを損なわないように配慮しなければならない
- ・感性の育成、手先を使う感覚・触感的なものも大切では
- ・実物を見せて体験することのほうが重要では
- ・何でもすべてICT化しようとすることに問題がある。やはり基本は何かを考えなければならない不易流行

【活用するときの意識が大切】

- ・各教科の「目標」に沿った活用方法が大切
ICT 活用が「目標」ではない事の周知
- ・ICT ばかりに偏ると逆によくない場合が出てくる。あくまでも ICT とのバランスが大切
- ・アナログとデジタルのコンビネーションをよく考える
- ・ICT 活用＝ICT 機器の使用という考えになって きているのでは。写真や資料をペーパーで掲示するのも立派な ICT 活用だと思えるべきではないか
- ・デジタルもいいが、アナログも必要。便利さだけが学習ではだめだと思う
- ・ICT を活用することが目的ではなく、生徒に効果がみられる方法をとることが大切

【デジタル(ICT)とアナログのバランスが大切】



〈写真提供〉
三縄小学校
学習発表会



【情報モラル教育・メディアリテラシー教育が必要】

- ・道徳面では、学校で十分指導すべき
- ・ICT を活用する時の弊害や情報の扱い方、無料＝善ではないなど大切なことを伝えていかなくてはならない
- ・生徒へのメディアリテラシー教育も同時に行っていく必要がある

【使う？使わない？使えない？使おう！】

- ・小学校と中学校では活用が違う。補助的に使うくらいでいいと思う
- ・担当の教員が必要と思えば活用する。無理な活用（強要・義務）はしない方がよい
- ・使用に適している教科とそうでない教科がある
- ・無理に使うものではない ・使いこなせない
- ・進めなくていい ・現状で充分だと思える
- ・教員のリテラシーとか、関心・意欲に課題
- ・学習指導要領や教育の情報化ビジョンにも書かれているので使って当たり前

4 おわりに

今から15年以上前になる。現在は閉校した池田第一中学校で徳島県の特例活動の研究会が開催されたとき、ある先生がいじめをテーマに授業を行った。その先生は自分で組み立てることができるほどパソコンが得意で、授業に関する情報収集や情報発信のためホームページも立ち上げていた。研究会前日の夜遅くまで準備をしていたときのこと、その先生が模造紙を廊下に持ち出し、習字の筆で授業の最後に黒板掲示する言葉を書いていた。今から考えるとデジタルとアナログの見事なコンビネーションだったと思う。当時も学校でのいじめが大きな社会問題になっており、研究会当日は県内のたくさんの先生方がその授業を参観されていたことを覚えている。その先生が立ち上げたホームページにはこんなことが書かれていた。

「私は『コンピューターでは、人は教育できない』と思っています。」

この言葉は、ICTが当たり前のように活用されるようになった今だからこそ、私たち教員が大切にしなければいけない言葉かもしれない。目の前にいる子どもたちが、これから出て行く社会は、現在よりも進んだICT（情報通信技術）が張り巡らされていることは確実である。だからこそ日常生活の中でICTに惑わされず、ICTを正しく使い、上手に活用する子どもたちを育てていかなくてはいけないと思う。そのためにどう取り組んでいくのか、私たち教職員の姿勢や意識が大切になってくるのではないだろうか。

今回、専門教科別の集計ができませんでした。ご了承ください。校務多忙な中、アンケートにご協力いただいた三好市・三好郡の教職員の皆様に感謝申し上げます。

〈参考資料〉

※『学校でのICT活用についての実態調査と教育情報化への提言』・『学校でのICT活用についての実態調査〔データ集〕』・・・社団法人日本教育工学振興会・日本マイクロソフト株式会社（共同調査）

※『先生と教育行政のためのICT教育環境整備ハンドブック2012』・・・一般社団法人日本教育工学振興会

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年以降）

集	年 度	内 容
30	平成 元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして ー学校・家庭・地域が一体となってー 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」 ーふるさと意識を高めるためにー 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 ーボランティア活動を通してー 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 ー同単元類似内容の指導の試みー 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ ー児童・生徒の理解と援助のためにー 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道徳教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画 ー平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試みー 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して ーコミュニケーション能力の育成のためにー 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー人とのかかわりをとおしてー 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 ーたて割り班の活動を通してー 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 ー進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指してー 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか ー学校行事などの活動を通してー 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 ー学習意欲を高める理科の指導ー 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 ー個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通してー 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究 ー性教育の実践を通してー 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して ー体験的活動を通してー 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導 ー行書を活用した筆写活動の日常化をめざしてー 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子

集	年 度 (平成)	内 容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめざして ー主体的に取り組む活動ー 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 ー一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習ー 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成 ーボランティア活動をととしてー 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代 奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめるー私案 ーピース・メッセージの実践を通してー 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり ーすこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事ー 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み ー教科、特別活動の実践を通してー 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 ー家庭科ー 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考えるー 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして ー「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組みー 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 ー体験学習・ボランティア活動を通してー 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして ー自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援ー 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指してー中学1年生への意識調査と実践例ー 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 ー施設訪問を通してー 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 ー「何について」「どのように」「どこまで」指導するかー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代

集	年 度 (平成)	内 容
38	9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境をどのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切にし、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して ー積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成ー 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適應問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 ーある不登校児とのかかわりを通してー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために ー地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成ー 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は？ ー三好郡内小中学生意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） ー生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成ー 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 ー名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通してー 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 ー「選択の時間」を生かした取り組みの中でー 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ 自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 ー地域の特性を生かした取り組みの中でー 池田第一中学校 教諭 立花 久 三好郡における情報教育の現状とその考察 ー郡内小中学生・教職員の意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子

集	年 度 (平成)	内 容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 ー幼児が自ら生活していくための教師の役割ー 白地幼稚園 教諭 木徳 友子 「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 ーへき地の特性を生かした様々な体験活動をとおしてー 東山小学校 教諭 高篠 佳子 生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道 T T授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成12年度・13年度)から中学校数学におけるT T授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 ー金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 ー学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワークー 三好郡ネットワークセンター I C T コーディネータ 中川 斉史 生藤 元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 ー身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかかわればよいかー 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子 「生きる力」を育む総合的な学習 ーふるさとを愛し、人や自然と積極的にかかわろうとする児童の育成をめざしてー 出合小学校 教諭 岡 佳子 「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について ー人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるためにー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求 ー「本との出会い」をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校 「みる力」を育てる美術教育 ー美術の基礎・基本をみつめてー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元

集	年 度 (平成)	内 容
46	17	幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元 文字式の指導に関する研究 ー1年文字式における生徒の理解の仕方についてー 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 ー主体的により良く伝え合う力の育成をめざしてー 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 ー共に生きる町づくりについて考えようー 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」ー高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながらー 第2ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 ー学校・家庭・地域の連携した取り組みー 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために ープレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用ー 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」ー何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析をー 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 ー子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えようー 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 ー評価活動におけるマークシートの利用ー 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 櫟生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 ー『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心としてー 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 ー構成的グループエンカウンターを考え方を生かしてー 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして 一人やものとかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－ 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－ 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 一人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－ 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－ 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－ 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－ 東祖谷小学校 教諭 森永 直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －持続発展教育の視点を取り入れて－ 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－ 昼間小学校 教諭 山口 恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所 研究員 岡本 博一